

オラが適当に書いた短編集だぎや

ダス・ライヒ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り、駄文短編小説をアップする所。

一次創作を始め、色々な二次創作をうpする予定。

取り敢えず、見てっちょよ。

目次

| | |
|----------------------------|----|
| あのFPS映画の室内戦シーンをやってみる | 1 |
| 学黙にDOMワールドを制圧したオリ主をぶっこんでみる | 8 |
| 復讐異世界旅行記 旧第一話 | 27 |
| 無駄に人を殺す戦争物 | 42 |

あのFPS映画の室内戦シーンをやってみる

廃墟となったショッピングモールの屋上にて、一組の男女が銃を携え、屋内へ入ろうとした。廃墟周辺には、突撃銃や散弾銃で武装し、アーマーやタクティカルベストなどで装備した男達が居り、出入り口にゾロゾロと雪崩れ込むように突入してくる。二人はその男たちと、傭兵たちの迎撃を行おうとしているのだ。

突入してくる武装した男達の武装はAKMと呼ばれるAK-47突撃銃の改良型モデルや、AK-74突撃銃のカービンモデルであるAKS-74Uに、ソビエト連邦崩壊後に生産が開始されたTAP TOZ-194散弾銃と言ったロシアの銃火器を中心としている。

一方で、彼らを迎え撃つ男女の装備は、第二次世界大戦下のイギリス陸軍歩兵のP-37野戦服と一式装備を纏った女性は服装に似合うステン・ガンMkV短機関銃であり、男はウエンチェスターM1912散弾銃と言った古臭い物だ。

装備の差では突入してくる男達が圧倒的に上だ。しかし、戦術を生かせば勝機はある。

「シユン君、準備は良い？」

「ああ、いつでもOKだ」

長い黒髪の上に濃い緑色のベレー帽を被った一目で女性と分かる程の胸が豊満な女性に問われたシユンと呼ばれる背丈が190cmはある男は、彼女が軍人であると認識してか、返事を敬礼で返した。問う彼女も、女性ながら身長が176cmとかなりの高身長だ。

「準備は良いようね。私が先に行くから、シユン君はその後ろからついてきて。それじゃあ、行くわよ！」

その返事を聞いて満足した女性は、鉄パイプにピストルグリップと引き金、木製クリップとストックを付けた短機関銃の右側のボルトにある安全装置を外し、廃墟の屋内へと入った。

屋内へと入り、下の階へと下る階段近くに来れば、前衛を務める女性がハンドサインで「止まれ」の合図を出し、足を止める。どうやら何名かの敵が階段を上がっているようだ。

階段を上がって来た三名ほどが見え、直ぐに女性は今手にしている短機関銃の引き金を引く。数十発ほど撃ち込めば、上がって来た三人のうち、二人がばら撒かれた9mmパラベラム弾を浴びて倒れた。最後の一人は、シユンが持っている散弾銃の散弾を浴びて息絶える。

『先行した三人がやられた!』

「他に何人か上がってる。手榴弾を使ってやりましょう」

階段の下からまだ残っている傭兵たちの声が聞こえ、彼女は手榴弾を投げるように命じる。女性の指示に応じ、シユンはソ連のF1手榴弾を一つ手に取り、安全ピンを外して更にレバーを外し、少し間を空けてから階段の下に向けて軽く投げた。

『手榴弾?!』

下から声が聞こえ、その後到手榴弾が爆発する音が聞こえた。爆発の影響ではこりが舞い上がり、前衛の女性に降り掛かる。

「これで大概片付いたかな? じゃあ、行きましょうか」

少し衣服についた誇りを振り払ってから、女性はシユンを引き連れて階段を下った。

階段を下った先には、無残な形となった二人の傭兵の亡骸が確認できる。これを見た女性は顔を引き付けたが、一気に全滅してくれたことにホッとす。

「良かった、さっきので全滅してくれた」

後ろからついてくるシユンに感謝の意をウインクで表しつつ、彼女は通路から広いバルコニーへと出ようとした。

バルコニーへと出ようとした時、左側面から敵の銃撃を受け、被っていたベレー帽を吹き飛ばされた。直ぐに彼女は通路側に退避し、数発ほど撃ち返してから身体を遮蔽物の壁に引っ込める。そんな時に、自分達がやって来た通路側に、一人の敵兵が現れた。

「死ね!」

敵兵である傭兵は、手にしている突撃銃を撃とうとしたが、撃つ前にシユンの散弾銃の散弾を浴び、血飛沫を上げながら息絶えた。これに彼女は例の言葉を述べる。

「ありがとう。何から何まで」

そうお礼を言った後、女性は短機関銃を撃ちながら目の前に見える柱に移動した。敵が撃ち返してくる中、何とか柱まで到着し、短機関銃の再装填を始める。再装填を終えれば、短機関銃を左手に持ち変え、こちら側まで来るよう銃声に負けないくらいの声量で告げる。

「援護射撃するからこっち側に来て！」

この指示にシユンは無言で頷いた。それを確認した女性は、援護射撃の準備を始める。

「走って！」

言った後に、女性は短機関銃で敵の牽制を始めた。向こう側から撃ってくる敵は、遮蔽物に身体を引っ込め、銃撃を止める。敵からの銃撃が止んだところで、シユンは全力疾走して彼女は要る場所まで来た。そこで彼女が撃つのを止めたため、敵が銃撃を再開する。

「向こうの窓まで走って！」

銃弾が柱や壁に当たり、埃や砂塵が舞う中、女性は板で覆われた窓の方まで走るよう大声で指示を出す。これに応じ、シユンは窓まで走る。窓を塞ぐように釘で付けられた板の間には、回り込もうとする傭兵が数名ほど見えていた。直ぐにシユンは散弾銃を構え、窓の間に照準を向けて引き金を引く。

「ぐわっ!？」

「気付かれた！」

窓の間から撃たれた傭兵は息絶え、残っている三人ほどが直ぐに持っている銃で撃ち返そうとする。彼らが撃ち返す前に、シユンは窓のバリケードに思いつきり体当たりを仕掛けて突き破り、屋上に飛び出した所で三人の傭兵に対して散弾銃を浴びせた。

一発目で狙った傭兵の左腕が引き千切られ、二発目で二人目の傭兵の腹に大穴が開く。残る傭兵の一人に向けて引き金を引こうとした時、散弾銃の弾が切れた。

「クソッ！」

「貴様もこれで終わりだ……ぐっ!？」

散弾銃が弾切れとなった所で、傭兵はバラクラバ越しで笑い、手に持っている銃口の短い突撃銃でシユンをハチの巣にしようとしたが、

持っている散弾銃を投げ付けられ、怯んでしまう。怯んだ傭兵は視界からシユンを離し、その隙に彼は敵兵に接近して突撃銃を持つ手を素手で攻撃する。

「ぶっ！」

「オラあー！」

「う、うわあああ!!」

敵が銃器を離すまで右腕を殴り続ければ、シユンは左手で相手を外際まで追い込んだ後、思いつ切り力を込めて相手を突き飛ばした。四階あたりから突き飛ばされた傭兵は、悲鳴を上げながら地上へと落下し、やがて鈍い音がしてから悲鳴を上げるのを止めた。シユンはそのことにせず、突き落とした傭兵が持っていたAKS—74Uを回収して、自分の相棒に銃撃を加えている傭兵たちの背後へと回り込む。

「おい、お前?」

戦友達の背後を守る傭兵がシユンに気付き、手に持っている銃を撃とうとしたが、引き金を引く間もなく彼に撃ち殺される。殿を仕留めたシユンは、女性に向けて銃撃を加えている傭兵らの背後を取り、背中を晒している傭兵らに、容赦なくフルオート射撃を弾切れになるまで浴びせて制圧した。

自分の脅威を取り払ってくれたシユンに対し、女性は例の言葉を述べてから、彼の近くに吊り下げたリフトを使って梁によじ登るよう告げる。

「そのリフト使って梁に上って！ 下から何人か来てる！」

「了解！」

シユンはこの指示に応じ、弾切れになった騎兵銃を捨て、目前のリフトに掴まり、高いところによじ登ってから近くの梁に飛び移った。少し勢いを着けて飛び移ったので、危うくバランスを崩しかけたが、何とか持ち直し、周囲警戒をしながら自分が潜んでいる場所に来る傭兵らを確認する。

奇襲を仕掛けるタイミングを見計らい、前衛の傭兵が自分の居る梁の近くまで来れば、ナイフを抜いてからその傭兵に飛び掛かり、喉元にナイフを思いつき突き刺す。喉元を強く突き刺された傭兵は、物

の数秒で息絶える。

「このゴリラー！」

残っている二人が直ぐにでも持っている銃を撃とうとしたが、シユンは素早く動いて左手の傭兵が持つAKMの銃身を掴み、一旦自分の所へ引き寄せてその傭兵の顔面を右手で思いっきり殴った。怯んだのを確認すれば、魔も開けずに右手の男が銃を撃つ前に、数秒ほどで男が持っている銃の弾倉を引き抜き、弾倉で男の頭を力強く殴る。

「ぶべっ!？」

弾倉が押し折れるほどの強さで殴られた傭兵は脳震盪を起こし、その場に倒れ込んだ。

「ゴリラが……!？」

左手の男が直ぐに復帰して、鼻血を垂らしながら腰のホルスターから抜いたPMマカロフ自動拳銃をシユンに向けて撃とうとするも、続けて顔面を強く殴られ、最期は離してしまった自分の拳銃で撃ち殺されてしまう。

「うっしやー！」

「うっしやじゃねえ! 今すぐ駆除してやるぜ、このゴリラ野郎!」

本の数秒ほどで、プロの傭兵三人を片付けたシユンであるが、最後に来た傭兵の散弾銃が向けられた。反撃に出ようにも、間に合わず、後は散弾銃を浴びせられて肉塊へと変えられる運命かと思ったが、パイプにピストルグリップと木製のグリップにストックをくっ付けたような短機関銃の銃声が聞こえ、散弾銃を持っていた傭兵は倒れた。

その銃を持っているのは、第二次世界大戦下のイギリス陸軍の野戦服を着た彼女だ。

「また助かったぜ、ありがとな!」

「お礼は良いから下に敵が来てる! 直ぐに迎撃態勢!」

例の言葉をまた述べるシユンであったが、彼女の言う通りに下の階を覗いてみると、一個分隊程の人数が居り、彼が頭を出すなり一斉に持っている銃を撃ってきた。

「うおっ!？」

『上の連中がやられた! 何人か奴の背後に回り込め!!』

直ぐに頭を引っ込め、まだ残っている手榴弾の安全ピンを抜き、それを下の階に向けて投げ込んだ。爆発音が聞こえたが、断末魔の類の悲鳴は聞こえなかった。下に居る傭兵たちは、銃を撃ちながら上階へと上がるようにするが、二階ほど上に居る彼女がそれを妨害する。

一体多数の銃撃戦が行われる中、未だ身を隠しているシユンは、女性が撃ち殺した傭兵が持っていた散弾銃とAKMの予備弾倉を取り、前の死んだ三人の傭兵と同じ場所から出て来た傭兵一人を散弾銃で射殺してから、ポンプを引いて空薬莖を排出し、自分の背後から襲い掛かろうとする傭兵が来るとされる自分から見て左手にある階段に向け、手榴弾を一つ投げ込んだ。

「グワアー！」

「ビンゴー！」

爆発の後に悲鳴が聞こえ、両足を失った傭兵が見える位置まで飛んだ。これを見てシユンは見事に始末できたことを喜び、先ほど手榴弾で爆死した傭兵の死体がある階段に向けて走った。段差を飛び越えて室内へと入れば、こちらに向かってくる傭兵が一人見えた。

「あそこにうわっ！」

直ぐにシユンは散弾銃を撃って、敵兵が撃つ前に射殺する。次に先に殺された戦友の仇を討とうとする傭兵の銃撃を近くの柱を遮蔽物にして回避し、数秒ほどで数発ほど傭兵が隠れている場所へ撃ち込み、釘付けにする。動かなくなったのを確認すれば、そこへ敵が動かないうちに一気に回り込み、敵が反撃に出ないうちに散弾銃を撃ち込んで射殺した。

遮蔽物から出れば、連射の効くAKMを回収し、増援として室内に入ってくる傭兵に向けて発砲する。一人目を射殺すれば、右手の部屋から飛び出してくる二人目を射殺、続けて背後より自分を撃とうとする三人目が居る方向へ振り返り、コンマ単位で引き金を引いて撃ち殺す。

弾倉の中身もそろそろ無くなる頃合いなので、直ぐに敵から拝借した予備弾倉を取り、銃本体に付いてある弾倉を予備弾倉で弾き、その弾倉を銃本体に付けて再装填を終えた。

再装填を終えて敵が居ないことを数秒後で確認し、通路を進んでいけば、銃を構えながら前進する彼女の姿が見えた。最後と思われる傭兵一人が階段を上がり、彼女を見るなり掴み掛る。

「キャッ！」

「マリエー！」

傭兵の一人と取っ組み合いとなる彼女の名前をシュンがようやく叫べば、彼はしつかりとストックのパッドを右肩のくぼみに正確に当て、右頬をストックに密着させる。グリップを強く握り、左側のレバーをフルオートからセミオートに切り替え、しつかりと照準をマリエと取っ組み合いを行っている傭兵の頭部へ合わせ、引き金を引いた。

例え命中精度が悪いAKシリーズでも、他の突撃銃と同様に照準を合わせて単発で撃てば当たる。それに使っているAKM突撃銃は、先代のAK-47のよりも操作性が向上しており、割と命中率は高い。その為に正確に、マリエと取っ組み合いをしている傭兵の頭部を撃ち抜けたのだ。

自分と取っ組み合いをしていた傭兵が死んだのを確認すれば、マリエはその死体を階段に向けて蹴り飛ばし、シュンに向けて例の言葉を述べた。

「ありがとう、助かったわ」

「これでお相子だ。つつても、一回だけだがな」

「それもそうね。でも、今は関係ないわ。さあ、早く武器庫へと行きましょう。敵が占拠してるかも。貴方の得物が無事かどうか確かめないとね」

「ああ、そうだな。急ぐか」

マリエがお礼を言えば、彼女に何度も助けられているシュンは、これでお相子にはならないと笑みを浮かべながら告げる。これに対しマリエも同じく笑みを浮かべながら言った後、階段を降りながら武器庫の事を話し、敵に占拠されてどうか心配する。

それを聞いてシュンもマリエの後に続いて階段を降り、武器庫がある方向へと向かう彼女の後へ続いた。

学黙にDOOMワールドを制圧したオリ主をぶつこんでみる

未来の火星にて、軍事企業UACは、火星の衛星フォボスとダイモスとの間に秘密裏に瞬間移動装置の実験を行っていたが、実験の最中、偶然にも地獄の門が開いてしまい、たちまち火星の基地は、地獄からやって来た住民によって地獄へと作り変えられた！

事態を鎮圧するため、UACは制圧部隊を送り込むも、地獄の住人達には適わず全滅。このまま火星は地獄の一部と化すかに思えた。

だが、希望は潰えてはいなかった！

実験中に身長2mの謎の成人男性の遺体が瞬間移動装置より出て来て、遺体安置所へと放置されていた。

地獄の門を開け、通じてしまった際に、その遺体は当然の如く放置されたが、地獄と通じた直後に復活！

偶然にも近くにあった銃を手に取り、自分を同胞へと変えに来た地獄の住人らを始末し、更に近くに保管されている強力な一張羅を身に纏い、それから水を得た魚のように地獄の住人たちを次々と惨殺しながら地獄へと突入する。

道中、大剣まで手に入れば、更に強くなり、もはや地獄の住人でも裸足で逃げ出すほどの恐ろしい化け物と化し、殺戮の快進撃を続ける。誰も止める者もおらず、その男は遂に地獄の支配者まで殺してしまう。

これにより火星の地獄化は防がれ、地獄化は免れたが、当の英雄と言える男は何処かに去ってしまった。

果たして、彼は何所へ行ってしまったのだろうか？

それは、これから始まる物語で分かる…。

「いて…！ 何所だこゝあ？」

とある場所で目覚めた2mの男は、辺りを見渡して自分が何所に居

るのかを確認した。

空は夕暮れ前時で季節は桜が舞う春ごろ、場所は建造物からして何処かの学園だ。

男の容姿は若いのに白髪頭で、肌の色からアジア系と見えるが、片目は真つ赤な瞳である。

「学校かよ。まあ、前の地獄よりは遥かにマシだな」

場所が分かれば、前に居た場所より遥かにマシと言って、立ち上がって何処か人に居そうな場所へと向かう。

「おっと、この格好じゃ、ポリ公を呼ばれちゃうな。どうすかつな？」
ここで男は、自分の格好に気付き、この格好をどうするか考える。

彼の格好はSF作品に出てきそうな緑色の戦闘用アーマーであり、背中には銃身が短く切り詰められた二連装散弾銃と、巨大な鉄塊のような大剣だ。

こんな格好で人にも喋り掛ければ、逃げられ、拳銃の果てに警察に通報されてしまうのは確実だろう。

どうした物かと悩んでいる最中に、黒い学生服を着た妙に足元がふらついている少年が男の前に姿を現した。

「ん？　ありゃあ学ラン。つうことは日本かここは！　やべえな、これじゃあコスプレとか言ってもサツに通報されるぞ。でも、なんかおかしいぞあの餓鬼」

人が現れたので、男はこの姿をどう言い訳するか悩み始める。

だが、少年は歩き方はおかしく、小さく呻りながら男に近づくばかりで、驚いて逃げようとしてもしない。

それを見ていた男も流石に気付き、おもむろに声を掛けてみる。

「おい、坊主！　酒でも飲んだか？　学校で酒はまずいだろ」

そう声を掛けてみたが、少年は何も反応せず、ただこちらにふら付きながら向かって来るだけだ。

「おい、聞いてんのか？　聞いて…!?!」

様子が変だと思った男は、近付いて少年の肩に手を置こうとした瞬間に、その少年は肩に出した手に噛み付いて来た。

しかし、男が纏うアーマーは鉄のように固く、肉まで到達しないが、

顎の力は並の人間を上回っていた。これには男も驚きを隠せず、思わず少年の頭を殴りつけてしまう。

「どうなってんだこりゃあ?!」 それにこの餓鬼、噛み付かれた跡がありやがる」

少年を殴り付けて吹き飛ばした男は、殴りつけて吹き飛ばした相手の身体に動物か人が噛み付いた跡があることに気付き、警戒を強める。

殴り付けられた少年は、不気味にゆっくりと立ち上がり、再び男に掴み掛つて来たが、頭と顎を男の両手で掴まれ、そのまま引き裂かれて惨殺された。

「なんでこんな場所に、アンデッドが居やがる。クソツ！」

自分が先程、無残に殺した相手が知っている歩く死者、アンデッドであると分かれば、男は周囲を見渡しながら、ここが地獄の続きではないかと不安を覚えた。

怒り任せに悪態を付けば、先の少年と同様、それも複数のアンデッドたちが音に反応して周囲から現れ、男にゆらゆらと向かって来る。

「地獄の陸続きって奴か? クソツタレめ」

そう男は、周囲から出て来るアンデッドらに向けて吐き捨てた後、背中の大剣を抜いて構えた。

「3...2...1...!」

周囲に群がるアンデッドらに対し、男は直ぐに巨大な鉄塊を直ぐには振るわず、ある程度の距離まで来るのを冷静を保ちながら待つ。

十分な範囲まで、数体ほどのアンデッドが近付けば、男は手にしている大剣を力を込めて振った。

振るわれた巨大な刀身は、アンデッドたちを歩く死体から惨殺死体へと変え、地面や壁に血や肉片に内臓らを飛び散らせる。既に息絶えた身なので、血は余りでないが、それでも同じ殺され方をした生きた人間よりも負けないグロテスクな光景が広がっている。

一度に複数のアンデッドを惨殺死体に変えた男は、続けて数体のアンデッドを大剣で排除しつつ進み、進路方向を塞ぐアンデッド三体を同時に横の一振りソードオフショットガンで肉片に変えた後、空いた左手に二連装散弾銃を取

り、背後より群がるアンデッドらを肉片へと変えた。

発射された弾に入ってある球体の数は幾つだろうか、学生アンデッドと教師アンデッドらは原形を留めない程に肉塊と化している。更に第二射目が撃ち込まれ、屠畜場染みた光景が作り出される。

「で、この学園全員を相手にしなきゃならねえのか？」

数十体を瞬く間に元の死体に戻した男だが、それでも群がって来るアンデッドらに対して言った後、手近な集団に向け、巨大な大剣を振るった。

男がこの歩く死者^{アンデッド}の溢れる世界に来て同時刻、まだ人である十代後半の高校生の少年二人と歳のわりに胸が大きい少女一人は、必死でアンデッドから身を守る屋上へと逃げていた。

少年の一人は、左腕に赤く染みた布切れを包帯代わりに巻いている。この道中に噛まれたと言う事だろうが、まだ周囲に居るアンデッドと化していない。だが、目の下には熊が出来ており、長くは人間ではいられないだろう。

そんな人間の状態を踏ん張っている仲間を、バットを持つ少年とモップを槍にしている少女は、的確にアンデッドの頭を狙って突破口を開き、安全地帯である屋上の展望台を目指す。

「展望台の方に誰か居る！」

「あれは…!?!」

咬まれた少年の一人がアンデッドの頭をバットで叩き潰した後、屋上に誰かいるのを見た。

そこに居たのは、この日本に居たら確実に警察に通報されてしまう背中に小銃を背負い、手にはM1A1トンプソンと言う有名なトンプソン短機関銃の大戦時のモデルを持った女性だ。

服装は手にしている銃と同じ年代の衣服であるが、大戦時のアメリカ軍の戦闘服であり、大変動き易そうな物であるが、胸は少女よりもかなり大きい。

これで動けるかどうか心配であるが、彼女は少年たちを見るなり、トンプソン機関銃から小銃のM1ガーランド半自動小銃に切り替え、

援護射撃を始めた。

M1ガーランドは、八発の銃弾を装填することができ、尚且つ当時の小銃の主流であるボルトを引いて一々空薬莖を排出したり、弾を薬室に送り込む必要も無く、自動小銃のように撃てるアメリカ軍の傑作小銃だ。

八発撃ち切れれば、クリップが排出口から音を立てて排出され、直ぐに弾切れと分かる。

だが、この隙を突いて敵兵に近付かれてしまうが、熟練の兵士はそれを利用して、空のクリップを投げて誘き寄せせる手段として使っている。

そんな小銃を持っている彼女の射撃は正確であり、的確に周囲のアンデッドたちの頭を撃ち抜き、少年たちは天文台まで非難することに成功する。

「なんで銃を持つてるか分かりませんが、ありがとうございます……！」
「そんなことは良い。私の妹を見なかったか？ 工具のような銃を持った十代前半の少女だ」

先頭に立っている黒い学ランの下に赤いシャツを着た少年は、その女性に感謝の言葉を述べたが、彼女はそれはどうでも良いと言って、自分の妹を見なかったかどうかを問う。

これに二人の纏める少年は、問われた彼の代わりに答える。

「工具のような銃？ 銃を持っている人は貴方しか見てませんよ。それに、貴方は何なんですか？ 古い銃を持って学校の屋上で……ゴホッ

！」
「永ひさし!？」

逆に問うた少年であったが、既にアンデッド化の兆候が進んでいるのか、吐血し始めていた。

それを心配そうに彼女とされるこの歳にしては胸が大き過ぎる少女が近寄り、解放し始める。

これに女性は思わず銃に手を出してしまいそうになったが、まだ人間の状態を保っている様子なので、引き金から手を離し、彼らを迎え入れる。

「兎に角、ここに入れ。バリケードを作らねば」

「分かりました。孝、麗、この人の言う通りに」

「分かったー!」

咬まれた自分を迎え入れた彼女に対し、永と言う少年は、孝と呼ばれた少年と麗と呼ばれる少女をまとめ上げ、向かって来るアンデッドの侵入を防ぐため、天文台の中にあるあり合わせな物で、唯一の出入り口にバリケードを築き上げた。

それと同時に、地獄より来た大男が大剣を振るってアンデッド、ゾンビの屠畜場を作り上げているが、彼女らには聞こえていないのか、必死にバリケードを拵えている。

ヨーロッパで比較的大柄の白人女性のおかげか、数分もしないうちに即席のバリケードは出来あがり、アンデッドの侵入の心配はなくなった。

一難去った所で、再び永は古臭い銃とそれに似合う格好をしている彼女に対しての質問を始める。

「その姿は自衛隊では無いと伺いますが、何者なんですか?」

「私か? 私はコンスタンティナ・アン・カポディストリアス、アンで良い。私、いや、私と妹は西暦1945年のドイツの片田舎の村にある地下に運び込まれた聖遺物を回収するため、そこに潜入していたが、バリケードの外で動き回ってる奴らよりも悍ましい物と戦っていた。だが、周囲の光が私達を包み、君たちの時代まで連れてこられたようだ」

「言ってる意味が分からないな…」

アンは自分がこの未来の世界に来た経緯を話したが、孝は言ってる意味が分からないと告げた。永も麗も同様であり、目前に居る女が、精神異常者ではないかと疑い始める。

「あの、仰ってる意味が分からな過ぎるんですが…」

「そうか? これで少しは理解してくれらると思っただが…」

永が全く理解できないと孝に続いて言えば、アンは首を傾げ始める。

そんな時に、上空を双発式エンジンの多目的ヘリUH-60が通過

した。緑の迷彩色と日の丸が機体の側面に描かれていることから、陸上自衛隊所属と分かる。そんな通り過ぎようとしているヘリに、麗は自分等がここに居ると知らせるために、大声を上げて呼ぶ。

「おぉーい!!」

「無駄だよ。あのヘリは政府の命令を受けて飛んでいるんだ。僕たちより優先な方をね」

「ああ、街もあんなだしな…」

「そんな…」

ヘリを呼び止めようとする麗だが、ヘリは無視して目標とされた場所へと飛んで行く。

それを無駄な行為と告げた永は、街を見ながら告げれば、孝も続いて彼女に告げた。街の様子を見た麗も、絶望的な表情を浮かべ、街の惨状を見る。

「あれでは、誰も助けはくれないな。警察も同様だ、通報しても来ないだろう」

アンも同意見であり、この状況では、自分等を助けてくれるものは居ないと告げる。

更に絶望感が沸き上がる中、麗は自分の父が警察官だと知っていたためか、孝が持っている携帯を奪って直接電話した。

しかし、結果は絶望的。彼女の父は麗を知り合いの孝と勘違いし、娘の事を頼んだと言ってから電話を切る。

「お父さん？ お父さん!?!」

「君の父は警官のようだが、娘を迎えに行けない程の忙殺されているのだろう。ここは諦め…」

「あんだ、その言い方は無いでしょう。麗だって必死に…」

「ゴホッ！ がああ…」

『永!?!』

自分とは気付いてもらえずに電話を切られた麗に対するアンに対応に、孝は少し怒りを覚えたのか、彼女の代わりに文句の一つを言うとしたが、永が吐血し始めた。

これに反応してか、アンは手にしているライフルを永の頭部に向け

る。

「もう長くは無いな。このままではいずれ、周囲にうろついている者達と同様の物となる。そうなる前に、ここで始末を付けるのが有効だ」

「なんでだよ、ちよつと噛まれただけだろう…なんでこんな酷く…」

「噛まれたらアウトだ。私達が居た過去の世界は、ただ戦死者の死体を使った物で、感染はしないが、この現代ではそうなるようだ」

咬まれれば感染する。

そう告げるアンに対し、孝は絶望して膝を着くが、更に彼女は続け、永の頭に銃口を向ける。今にもM1ガーランドを撃とうとするアンに対し、麗は銃口の前に立ってそれを防ごうとする。

「何の真似だ？」

「止めてください！ 永は奴らになんかならない！ だって永は…」

「止せ、麗。映画と同じなんだ。噛まれただけで駄目なんだ…」

「永、でも…！」

そんな麗に対し、永は自分はもう持たないと言って説得を試みるが、彼女は聞かない。

「僕は人間のままで死にたい。奴らになんかになりたくない！」

「永、しっかりして！」

「お願いです、撃つてください！ みんなに襲い掛かる前に！ 撃つてくれ！」

必死に訴える永は、吐血しながらも人間のままで殺してくれるようにせがむ。

だが、麗はそれを許さず、まだ銃口より離れないが、アンは彼女ごと撃つつもりで引き金に指を掛ける。

「心中でもする気か？ 私は躊躇いも無しに君を撃つことが出来る。

退かねば死ぬぞ」

「麗、退くんのだ！ この人は本気だ！」

「撃てるものなら撃つてみなさいよ！ 私は永と一緒になら…」

これに孝も麗の説得を試みるも、彼女は頑なにそこから動こうとしない。

そんな時に、アンは無理やり麗を退かせ、永に銃口を向け、引き金を引いた。

「ありがとう…!」

自分を人とのまま殺してくれるアンに、礼を言ってから永は歩く死者にならぬまま死んだ。銃声が響いた後、息絶えた永を見て麗は悲鳴を上げた。

悲鳴を上げた後に泣き崩れた麗は、そのまま両膝を着いたままであったが、数秒もしないうちに泣き終え、自分の得物を握って自分の恋人の仇であるアンに、尖ったモツプの金属部分の先端を突き刺そうとする。

「麗!」

この無意味な行為に走った麗に驚く孝であったが、アンはそれを片手だけで止め、更には彼女の唇まで奪う。これには孝も理解できず、ただ困惑するばかりだ。

「っ!? 離して!」

自分の攻撃を止め、更には唇まで奪ったアンを引き離した麗は、頬を叩く。

「…済まない。こうするしか方法が無い。それに、これは彼の望みだ…」

「…っ! だからって、いきなりキスなんて…! あんた、おかしいわよ…!」

頬を叩かれたアンは、麗に向けて謝罪したが、彼女はそれを許さず、顔を合わせないで向こう側に行って再び泣き始めた。

それを孝は何も出来ず、ただ見ているしか無かった。

「デブオタ! まだなの!」

同時刻、まだアンデッドとなっていない何処かの漫画家に似た少年と、ピンク色のツインテールの少女が、工作室でアンデッドに震えていた。

震えていると言っても少女だけであり、肥満体系な少年は釘打ち機と様々な工具を合わせて銃を自作するのに夢中になって一切の恐怖

心を抱いていない。

外のドアを叩く奴らは待つてはくれず、ドアを潰して工作室内部に雪崩れ込んで来た。

「き、来た!?!」

雪崩れ込んで来る奴らの集団に対し、少女が悲鳴を上げる中、軍才たである少年は冷静であり、正確にライフルのように釘打ち機を構え、全ての奴らの頭を正確に撃ち抜いた。

「ひ、平野!?!」

「少しブレがあるな。もう少し改良の必要が…つとー!」

工作室に入つて来た奴らをすべて倒した平野と呼ばれる少年は、ややライフル風味な釘打ち機の改良の余地があると言つてから、第二派に向けて釘を撃ち込んで倒す。

「リロード! 高城さん! 取り敢えずそこらの必要そうな工具を詰めてください! 急いで!!」

「ちよつと平野! この私に指図…!」

「入れてください」

「わ、分かつたわよ! たく!」

平時では自分より遥かに劣る平野に対し、こんな時にもプライド高い高城と呼ばれる少女は腹を立てたが、振り向いた際に見せた恐ろしい形相を見て、恐怖を覚えるも、一瞬にして微笑ましい笑みに変わったので、言う通りにして必要そうな工具を袋に詰め込む。

この間にも奴らが入つて来たが、全て平野の現役の兵士のような射撃で全て打ち倒された。

「詰めたわよ!」

「では、行きま…な、ナチゾンビ…!?!」

「ナチゾンビ? あんた何を言つて…つ!?!」

準備が終わつたので、工作室を出ようとした時、破壊されたドアに、旧ドイツ国防軍の陸軍の野戦服を着て象徴的なシュタールヘルムを被つた悍ましい姿のゾンビが立っていた。裂かれた腹から内臓が飛び出し、口は大きく裂け、鋭利な歯が見える。その姿を見た平野は、あの映画の事を思い出してそれを口にした。

驚く二人に容赦なく、ナチゾンビは殺そうと真正面から向かう。

そんなナチゾンビに平野も、釘打ち機を構え、頭に向けて釘を打ち込むが、被っているシュタールヘルムの所為で中々当たらない。

「駄目だ！ シュタールヘルムで弾かれてしまうー！」

「なんとかしなさいよ！」

「無理ですうー！」

歩きながら向かって来るナチゾンビに対し、高城はどうにかしろうと下がりながら言うが、平野は無理だと返す。

万事休すか。

そう思った時に、二人に天使が舞い降りる。

銃声が聞こえ、ナチゾンビは背中から無数の銃弾を浴びえて床に倒れた。

天使と言っても良いくらいの容姿を持つ美少女が、ナチゾンビを仕留めた銃、工具のような外見の短機関銃、M3A1グリーズガンを持って立っていた。服装は軍服では無く、四十年代の欧州の少女の服装だが、スカートが偉く短い。美少女の外見は、屋上に現れたアンを更に幼くした感じだ。

「あ、あれは45口径拳銃弾を使用するM3グリーズガン!? メジャーなA1モデルだ！ アメリカの戦争博物館で見た実物と同じだ!!」

平野は銃を持った美少女よりも、手にしている銃の事を言い始める。

「銃なんてどうでも良いでしょ！ それよりなんで銃を持った美少女がここに居るの!? ああもう！ 訳わかんないわ！ ホラー映画にナチゾンビ！ そんなで銃を持った美少女！ 夢なら醒めてよ……！」

自信を天才と表する高城は、次から次へと怒る超常現象に、ついてこれないようだ。

「取り敢えず、ここから出しましょう」

「うん」

ここは平野が仕切り、二人を連れて工作室を出た。

取り敢えず、一同は目的地を職員室に定め、そこへと向かう。道中、

一同は自己紹介を始める。

「私、ルリ、ルリ・カポディストリアスって言うの。よろしくね。で、なんでおっぱい大きいの？ 留年生なの？」

「私は高城沙耶たかぎさや、留年なんてしてないわ。今年に高校生デビューしたばかりよ。それと子の胸は自前！ そんなでこのキモイデブオタは…」
「平野、平野コータ…！ それ、本物？ それに腰のホルスターの拳銃はワルサーPPKだね…！」

銃を持った美少女がルリと名乗れば、沙耶とコータも名乗る。コータは、ルリが持っている銃が本物だと知ってかなり興奮していた。

そんな時に、沙耶はあのナチゾンビについて何か知っているのかをルリに問う。

「ねえ、あんた。あのナチスのゾンビ…奴らはなんなの？」

「あれね。私が未来に行く前に、お姉ちゃんと一緒にドイツの田舎町で戦ってたゾンビなの」

「ああ、聞いた自分が馬鹿だったわ。当てにならないわね、あんたのお姉ちゃんが頼りね」

「うん、難しい話は良く分かんないの。これ、食べる？」
「いらぬわよ、こんな状況で」

その答えは全く当てにならないので、沙耶はアンに会う必要があると
言って目的地へと急ぐ。

理由は彼女も生存者と合流して、職員室に向かっていると計算した
からだろう。

だが、行く前にやって行く方法がある。それは奴らアンデッドの習性だ。
手近に居る奴らに気付かれぬように、近くの物陰に隠れ、偶然近く
にあった雑巾を奴らに向けて投げ付けてみる。

「何しているんですか？」

「決まってるじゃない。あいつ等の習性よ、習性。どうやって私らを
嗅ぎ付けてるか確かめてんのよ」

同じく隠れているコータに問われた沙耶は、問いに答えつつ、雑巾
を当てても気付かない奴らに対し、今度は別の方向へ向けて雑巾を投
げてみる。

すると、奴らは音が鳴った方向へと吸い寄せられるように向かって行く。音に反応する習性があるようだ。

「目が見えてないのかしら?」

「視力が無くて音に反応する…何処かのゾンビ映画の設定ですね」

「黙ってなさいよデブチン。ほら、行くわよ。それとあんた、鉄砲は撃たないようにね」

「うん、分かった」

取り敢えず、奴らに対しての習性がある程度に分かった所で、一同は目的地に急いだ。

「あれも、これも持つて行かないと」

「急いでください鞆川先生! 早くしないと…!」

一方での保健室。ここは直ぐに奴らにやられているかと思われたが、運良く全滅は免れたようだ。

保健の正規の先生では無い鞆川と呼ばれるアンに負けない程の美貌を持つ女性教師は、脱出する際に火挺な物を鞆に詰め込み、手間取っている。

窓やドアから殺到して来る奴らを抑え付ける男子生徒は、早くしろと急かすが、彼女はまるで聞こえていないのか、幾つか薬品を落とすしてしまっている。これでは仲間入りも時間の問題だろう。

「ぐあああ!」

「え、嘘…!」

そうこうしている間に、奴らを抑え付けていた男子生徒が噛まれてしまう。

自分も映画のようにゾンビになる。

噛まれた男子生徒を見て、そう思ってしまった鞆川であったが、助けが都合よく入った。

助けは木刀を携えし大和撫子を具現化したような上級生の女子生徒だ。彼女は手慣れた手付きで木刀を奴らの急所である頭部へ叩き込み、あつと言う間に保健室に雪崩れ込んで来た奴らを殲滅した。

「貴方は三年の毒島冴子さん?」

「如何にも、私は毒島冴子だ。荷物を纏めろ。直ぐにここから…」

鞠川に名前を問われた女子生徒は、直ぐに答えて次を警戒したが、その次は想像を絶する物だった。

「ロメロ映画だけじゃなくて、ナチス物も…!？」

「何を言っているか理解できないが、他の奴らとは大違いのようだ」

それはコータと沙耶を襲った旧ドイツ国防軍の軍服を纏ったゾンビであった。

戦死者の遺体を無理やり動かしたゾンビを前に、流石の温和な鞠川でも驚きは隠せなかったが、冴子は相手にしてきた奴らとは段違いの物と判断して警戒する。

飛び掛かって来る一体目の攻撃を防御しようとした瞬間に、その一体目のゾンビは外からの謎の攻撃で吹き飛び、壁に激突して元の死体に戻った。

二人は思わず、謎の攻撃が来た方向を見れば、そこには窓から保健室へと入って来て、手を翳している高身長の人好青年だ。彼は保健室へと完全に入り切ると、何も無い場所から屋内での近接戦闘に優れる武器であるショートソードを取り出し、襲って来るナチゾンビを次々と斬り捨てる。

やがて最後の一体を斬り捨てれば、好青年は鞠川と冴子に無事かどうかを問う。

「大丈夫ですか、お嬢さん方？ 私はルボル・パワールと言う者です。ルボとお呼びください」

「ああ、助かったのだが、ルボよ。それで、この兵士の奴らは一体…?」「体内に埋め込まれた金属に流された電流の影響で動く死体です。周囲に居る動く死体には、金属が埋め込まれていないようですが…?」「無事だと答えた冴子は、ナチゾンビについてのことを問い返した。

これにルボは、体内に埋め込まれた電流の流れる金属の影響で動いている死体だと答え、近くに倒れている奴らの死体を調べ始める。ナチゾンビと同じ電流が流れている金属が埋め込まれた物と判断しただろうか、死体解剖用のメスを何所からともなく取り出し、金属が埋め込まれてないか調べ始める。

「金属が埋め込まれていない…？ どうやって動いてるんだ!? 近くにネクロマンサーでも居るのか!？」

「まあ、このナチス物の奴らが動いている理由は分かりましたが、これは全く分かりません…それにネクロマンサーとかのファンタジー系統も…」

「そうか。なら、ここを出るしかないな」

金属が埋め込まれていないのに動く死体に驚くルボに、鞠川は理由が分からないと答えた。

更にルボは自分が知る動く死体を操る技術があると言ったが、魔法の類は感じられず、奴らに囁まれたばかりの男子生徒を忘れて保健室を後にしようとする。

自分を忘れて欲しくないのか、勝手に部屋を出ようとするルボを呼び止める。

「あ、あの…」

「ああ、囁まれた青年か。もう駄目なようだが…」

「私がやります」

呼び止めた男子生徒を見たルボはもう長くないと判断すれば、冴子は代わりに人のまま彼を死なせようとした。だが、その役目はルボに取られる。

「彼の最期は私がする。君はどうにも…その、生きた人間を殺してみたいと言う好奇心がある…」

「…」

「…地雷踏んじやつた?」

「ああ、済まない」

ルボは、冴子の奥深くに潜む感覚を感じ取ったのだ。これに彼女は表情を暗くし、鞠川は彼が触れてはならない物に触れたのかと問えば、ルボは謝りながら腰のホルスターに収めてあるCz75自動拳銃を抜き、安全装置を外して男子生徒の眉間に銃口を向ける。

「君の名前はなんだ?」

「い、石井です…」

「OK、石井君。一瞬で楽になる。目を開けたときは、天国かもしれな

い」

「ありがとうございます…」

奴らになり掛けている男子生徒の名前を問えば、彼は石井と答える。

名前が分かった所で、ルボは目を閉じろと指示をし、彼が指示通りに目を閉じれば、引き金を引いて彼の人としての最期を迎えさせた。それから彼の遺体の顔に白いハンカチを被せた後、一同は保健室を後にした。

「鞠川女史、ここで一番の選択肢はなんだと？」

「えーと、職員室に行くことかな。あそこに車のキーがあるし」

「決まりだな。職員室に行こう」

保健室へと出た後の選択肢が、職員室であると少し悩んだ後に鞠川が答えを出せば、冴子が決めて職員室へと向かうことにした。

道中に幾多の奴らと遭遇したが、対応できる武器を持つ冴子とルボは完全に倒さず、転ばせる程度に済まして目的地へ急ぐ。

これに鞠川は疑問を感じたのか、なぜ倒さないかを二人に問う。

「ねえ、弱点分かかってそんなに強いのに何で倒さないの？」

「時間が掛かる上に、弾薬の消耗が激しいからです」

「それに奴らは鈍い。こういう時は、軽くあしらってやるのが肯定だ」

この問いに、二人は急いでいる時は軽く倒す程度で良いと答え、襲ってきた奴らの足を狙って床の上に転ばせた。

「あーん！」

「大丈夫ですか？」

移動の最中に、鞠川が何かに躓いて転んだ。

これにルボは直ぐに介補するが、冴子は彼女が履いているタイトスカートを破り始める。

「走るには、向かない格好だ」

「もう、高かったのに！」

「なんてことを…」

タイトスカートを破った冴子に、鞠川は怒り始め、ルボは赤面する。そんな鞠川に対し、ファッションか命のどちらが大事かを問う。

「ファッションと命、どっちが大事だ？」

「両方！」

その問いに対し、鞠川は両方を選んだ。

「このまま行けば、この学園の生徒全員をぶつ殺しちまいそうだな」

一方で地獄より来た大男は、返り血塗れで周囲に転がる無数の死体を、奴らの一体の顎を引き剥がし、頭を踏み潰してから呟いた。

辺り一面が惨殺された奴らの遺体だらけであり、地面は血で真っ赤に染まっている。

「中に入ってみっかな」

校舎内に入ってみようかと思つて大剣を背中に戻し、まだ残っている奴らを素手で殺しながら校舎内へと入った。

中に入ったら入ったで奴らがうろついていたが、男は関係なしに進み、奴らを殺しながら何処かこの世界がどんな所か分かりそうな場所を探す。

『キヤー！』

「まだゾンビになってねえのが居るな。行くか」

女子高生の悲鳴が二階より聞こえたので、シユンはまだ生きている者が居ると確認し、助けるために階段を体格に合わない凄まじい速さで上がった。

「おい、生きてっか!？」

悲鳴を聞き付けて階段を上がれば、ツインテールの女子高生、それも沙耶が奴らの頭にドリルを差し込んでいる場面であった。彼女の周りには、釘打ち器を構えるコータと、M3A1グリーズガンから片手剣に切り替えたルリが居る。

先の悲鳴で奴らが幾つか集めてしまったようだが、心強い生存者達も集まって来た。

「麗！」

「左を抑えるわ！」

「私は左右をやる！」

上階の方からは孝に麗、それにM1A1トンプソンを構えるアン。

「こちらは任せろ！」

「一気に片付ける！」

反対側の廊下の方からは冴子に鞠川、ルボが現れ、手近に居る奴らを手早く片付ける。

戦闘は一瞬にして終わり、それぞれが周囲の安全が確保されたかと思つて安心しきつたが、予想だにしない敵の増援が現れた。

それは電流が流れる金属を埋め込まれて生者に襲い掛かる戦史者達のなれの果て、すなわちナチゾンビだ。

数は数体ほどであるが、当然現れたナチゾンビに驚いているのか、対応が遅れる。

「やれやれ、俺の出番のようだな」

そんなナチゾンビらに即応できるのは、大剣を抜いて背中に二連装散弾銃を持った大男だけだ。

彼は自分の出番が来たので、階段を上がり切り、張り切つて大剣を振るつて手近なナチゾンビを原形を留めないバラバラにした。

一同が突如として現れた大剣の男に、驚きを隠せない中、男はその大剣を振るい、一秒ほどで二体のナチゾンビを同様にバラバラにする。

ナチゾンビらもただバラバラにされるばかりでなく、乱入してきた男に集団で襲い掛かるが、返り討ちにされてバラバラにされるだけだ。

「離れてろ！」

離れた距離に居るナチゾンビは、射線上に居る者に警告してから二連装散弾銃を放つて肉塊にする。

この凄まじい散弾銃の威力に、コータは驚きを隠せず、身の丈のある鉄塊のような大剣を振るう男がただの大男では無いと判断した。

最後の士官帽を被つたナチゾンビを惨殺すれば、返り血塗れの顔で一同に無事かどうかを問う。

「よう、無事か？」

「あ、貴方は…？」

「瀬戸シユン!? 何故生きている!? お前はあの時に…」

「でも、なんかおっきくなってるよ」

無事かどうかを問えば、アンはこの大剣を振るう大男を知っていたのか、その死んだはずの男の名を口にした。

だが、ルリは男の身長が高くなっていると行って、別人ではないかと疑う。

これに、瀬戸シユンと言う名の大男は、自分が蘇ったことと、この世界に來た経緯を話す。

「地獄で勝手に化け物にされて蘇らされ、そこで地獄の王をぶっ殺したらこの死者地獄に來た。これで良いか？」

死んだはずの当の本人であり、悪魔として蘇らされたことや、この世界に來た経緯を大雑把に答えれば、アンとルリはやや混乱した。

シユンのことを知らない姉妹を除く者達は、当然ながら理解できないでいた。これにシユンは、安全な場所で詳しく話そうと提案する。

「まっ、俺は口下手だしな。向こうで話そうぜ、ここじゃいつさっきの連中に襲われるか分からねえ」

復讐異世界旅行記 旧第一話

とある異世界の海面の上空にて、大型の軍用機のコクピット内にて、背丈が190cm程ある大男が、シートの上で寝ていた。

コクピットのキャノピーからは、大型軍用機と同型が多数飛んでいるのが見え、戦闘爆撃機や護衛の戦闘機も含め、まるで空を埋め尽くすように飛んでいる鳥の群れのようなのだ。

男が寝ているシートの後方の貨物室には、降下用の戦闘服とパラシュート、銃身が短いカービン銃を持った多数の兵士達が左右にある席に腰を下ろし、降下地点の到着を待っている。

この輸送機は、C-5と呼ばれるかなりの重量を持つ戦車二両を搭載できるアメリカの大型軍用機であり、六〇〇名以上の兵員を輸送可能な軍用機だ。

その巨大な輸送機に随伴する戦闘爆撃機は、国連軍の複数の用途で運用が可能な軍用ジェット航空機であるトーンードIDSで、護衛の戦闘機は、アメリカ空軍の主力戦闘機であるF-16戦闘機だ。

どちらも採用から二十年ほどであるが、性能は高く、長らく主力として運用されている。

そして、この攻撃部隊の所属は、ワルキューレと呼ばれる国家ではない巨大な軍事結社である。ワルキューレに差し向けられた大軍勢が向かうのは、敵軍の手中にある大陸だ。

そんな高性能機に護衛されながら、男が寝ているC-5のコクピット内にて、パイロット帽を被った男の上官が操縦士から離れ、男の肩を揺すって起こした。

「おい、起きろ！ 同じ人種を殺すのが嫌で、ストライキか？ 俺は同じ人種を何百人も殺してるんだ！ 起きろシユン!!」

身体を強く揺すられて目を覚ましたシユンと呼ばれる男は、頭をかきながら目を覚ました。

「あつ、どうもつす」

「どうもじゃない、瀬戸大尉！ 俺達はこれから戦争に行くんだ！ 寝るのは戦闘が終わってからにしろ!!」

「ああ…すみません、中佐殿」

シートから立ち上がって上官に謝罪した後、シユンは直立不動状態を取り、敬礼した。

この瀬戸シユンと言う名で、黄色人種で黒髪黒目の男こそが、数年後に異世界を渡るとは、本人と上官であるファースミス中佐を含め、誰もが思わないことだろう。

シユンの肩を数回たたいたファースミスは、近くの壁に掛けられた受話器を取り、各中隊に集まるよう告げる。

「各中隊長、至急コクピット前に集合！ 早く集まらんと、戦場についてちまうぞ！ 急げ!!」

徴集の言葉を終えれば、受話器を壁に戻し、コクピット前の近くにある椅子に腰掛けた。

二分もしないうちに、ファースミス中佐の指揮下の中隊長達が集まり、彼の前に集まった。

部下達を集めた理由とは、敵が何であり、作戦目標の確認のためである。

「よし、最終確認だ。俺達ワルキューレの敵は、日ノ本の帝国と言う大日本帝国って言う国が、トンデモ技術を持たせたような帝国だ。奴等は海軍と宇宙軍が強いが、陸軍と空軍は凡庸だ。俺達が向かう場所には、敵の海軍も宇宙軍も居ない。安心しろ。だが、油断するな。敵は死に物狂いで来るぞ。気をつけろ」

シユンたちがこれから戦う敵「日ノ本の帝国」について簡単に説明した後、懐から地図を取り出し、それを壁に貼り付けるようシユンに無言で命じて、彼がそれを実行すれば、作戦目標に移る。

「次は作戦目標だ。俺達の任務は、先に降下した連中の救援だ。降下した後、先見者達と共に”日本帝国”の基地を荒らし回り、そこで上陸部隊と合流する。対空砲や地対空^Sミサイル^{M A}に、戦術機とか言う紛らわしい名前のロボットは、先に降下した連中と、海軍の更地になるほどの艦砲射撃でスクラップになってるはずだ。油断すんな、銃剣突撃や特攻やら玉砕を仕掛けてくるかもしれんぞ。これも気をつけろ」

作戦目標の確認を終えれば、シユンの肩をたたき、「もう良い」と目

で伝える。

「よし、脳味噌に叩き込んだな？ 各自、降下地点到着までコーヒーを飲むなり、小便と装備確認を済ませておけ。解散！」

最終確認を終えて、ファーススが解散命令を出せば、部下達がそれに従って貨物室へと戻った。

「シユン、装備の確認をしておけ。到着が近いぞ」

「了解ですよ、中佐殿」

視線を向けたファースに答えてから、シユンは腰に差してある日本刀を手に取り、鞘から少しばかり刀身を出し、刃こぼれが無いか確認した。

それから装備の確認を終えれば、寝ていたシートに立て掛けてあるFN SCAR—L大口径突撃銃を手に取り、異常が無いかどうかの確認を行った。

何も異常が無いと分かれれば、自スリリングと呼ばれる銃をつるす紐を肩にかけ、左脇のホルスターに収まっているHK MK23ソーコムピストル自動拳銃を取り出し、異常が無いかどうか確認する。

武器と装備の確認を終えれば、パラシュートが詰まったバックパツクを背負いに言った直後、機内が大きく揺れた。

「敵機だ！ 敵戦闘機部隊の強襲だ!!」

「なんだ、みんな潰したんじゃないのか!？」

操縦士からの報告に、シユンはキャノピーの外を覗いた。

外の光景は、日ノ本の帝国の戦闘機が味方の護衛戦闘機と交戦していた。

敵の戦闘機は、ワルキューレが所持している実在する戦闘機ではなく、架空の戦闘機だ。それも前進翼型だ。

「おい、対空砲は何やってんだ!? 撃ち落せ!!」

「この機体に対空砲なんて詰まれてませんよ!」

外から見える空戦に対し、シユンは対空砲で迎撃するよう指示したが、操縦士は尤もな答えを返す。

C—5は大型機であるが、対空砲や機銃など一切搭載しておらず、護衛機も無しの機体は、敵機に取っては格好の獲物なのだ。

護衛戦闘機が必死で追い払おうとしているが、主翼に日の丸を付けた敵機の性能が高いのか、何機かハエの様に落ちていく。

更に複数の敵機が護衛機の防御戦を抜け、密集形態をとる輸送機に向けてその牙を突きたてた。

『メーデー！　メーデー！！　こちらフアング8！　一番エンジンに火が！　それにミサイルを一発食らった！　もう持たない！　フアングリーダー、至急編隊から離脱したい！　たの…』

「こつちに来るんじゃねえか？」

「それだと俺達死んじゃうよ！」

近くの友軍機が、通信を終えないうちに撃墜され、墜落していく様子を見て、シユンが言えば、副操縦士はそれに答える形で声を掛ける。

無線機から悲痛な叫びが聞こえる中、こちらにも矛先が向けられた。

「9時方向より敵機襲来！！　ミサイルにロックオンされた模様！！」

「9時方向！？　側面じゃないか！　フレア！　フレア！！」

レーダー手からの知らせに、操縦士は副操縦士にフレアを撒くように告げた。

ミサイルにロックオンされたことを告げる警報が機内に鳴り響き、振動が伝わってくる。

やや不安になってきたシユンは、操縦士に無事に着けるかどうか問い詰める。

「無事に到着できんのか！？」

「SAMに当たらなければね！　それより席に座ってシートベルト着けてください！！」

「お、おう…！」

問い掛けたシユンに対し、操縦士は彼に席に着くように怒鳴りつけた。

勢いに押されたシユンは、言うとおりにして、近くの空いている席に座り、シートベルトを着ける。

これから何が起こるのかは、彼にも想像はできている。強い振動だ。頭を打って死なぬように、シユンは近くに掛けてあるヘルメット

を被り、しつかりを顎紐を付けて身構える。

数秒後、シюнたちが乗る輸送機が被弾し、機内に強い振動が流れた。

「うわあ！ 被弾した!!」

「何処だ!? 何処やられたんだ!?!」

「左翼だ！ 左翼を機関砲かなんかで撃たれた！ 三番エンジンから火が出てる!!」

シюнが被弾箇所を副操縦士に問えば、副操縦士はそれに答える。

「おい！ そんなことよりも三番エンジンを切れ！ 爆発するかもしれないぞ!!」

「了解!」
イエッサー

操縦士に言われたとおり、副操縦士は三番エンジンを切つて、被害を最小限にとどめようとする。だが、幾ら被害を抑えようとも、敵機は空かさず攻撃を浴びせ、撃墜しようとしてくる。やがてはシюнらに乗る輸送機のコクピットへ向け、敵機が航空機関砲を浴びせた。

「うわあ！」

「があ!!」

「おわあ！ 風貌が!?!」

風防に大きな穴が複数空き、操縦士や副操縦士の命を奪った。戦闘機の航空機関砲を受けて、酷く損壊しないだけマシだが、機体を動かす者が居なくなってしまう。風防が無くなって強い風が機内に入り込んでくる中、レーダー手が待機している先任操縦士を呼ぼうと風の音に負けないくらいの声量で叫ぶ。

「先任操縦士!!」

呼び出しはした物の、機体は大きく揺れており、来るまでには時間は掛かるだろう。レーダー手は近くに座っているシюнに視線を向け、彼に操縦桿を握るよう告げる。

「大尉、操縦桿を握ってください!」

「あつ? 俺、航空機の免許なんて持ってねえぞ!」

「簡単です！ 操縦桿を下に強く引っ張るだけ！ それまでに先任操縦士が来ます!!」

「クソ、どうなっても知らねえぞ!!」

強く勧められたシユンは、操縦士の死体を退けてから操縦桿を握り、前任操縦桿が来るまでの時間稼ぎを行った。

「上がれえええ!!」

気合いを込め、操縦桿を強く下に引つ張るシユンだが、機体は言うことを聞かず、ただ海面へと向けて落ちていく。

そんな時に彼の上官であるファースミス中佐が、前任操縦者よりも先にコクピットへと駆け付けた。

「おい、なに素人のお前が操縦桿を握ってんだ!？」

「そのハゲのリーダー手に頼まれて!」

「素人が操縦桿を握るな! 代われ!!」

上官の問い掛けに対して、率直で答えたシユンだが、パイロットライセンスを持つファースミスは彼から操縦桿を奪い、手荒に扱わず、機体を上昇させて見せた。

「凄い! 俺よりも先に!」

「舐めるなよ! これよりデカイのを操縦した経験がある!! それと操縦桿は女のように扱え!」

水平飛行に戻したことで、後から駆け付けた前任操縦者は、ファースミスの操縦技術に舌を巻いた。

彼がシユンに向けて操縦桿を手荒に扱わぬよう注意した後、後どれだけ飛べるかを操縦者に大声で問う。

「でっ! 風貌無しでどれくらい飛べる!？」

「もう駄目だ! 弾を食らい過ぎた! このデカ物が飛んでいられるのが奇跡なくらいだ!! 海に不時着させる! 何かに掴まれ!!」

前任操縦者が、自機が持たないと言って海に不時着させると答えれば、ファースミスは怒鳴り付ける。

「なにい! 不時着だど! 着陸地点まで持たないのか!？」

「エンジンが持たねえよ! それより口を閉じろ! 舌噛むぞ!!」

着陸地点までは持たないと告げれば、前任操縦者はファースミス無理矢理近くの席へ突き飛ばし、不時着体勢を取る。

これにはシユンも、慌てて席へ戻り、シートベルトをしつかりと着

けた。

「クソツ、海じゃなくて浜辺だ！ 死なないように祈れ!!」

「何!? 冗談じゃねえぞこらあ!!」

しかし、大分大陸へと近付いていたので、海面に着水出来ず、砂浜への不時着となった。

それを知らされたシユンは、海面とは尋常にならない被害になると予想し、悲痛な叫びを上げた。

物の数秒で機体は大きな音を立てながら浅い海面に着水して、一回バウンドしてからその衝撃で上陸戦の真っ直中の砂浜に着き、対戦車妨害物のチェコのハリネズミを弾き飛ばし、数十メートルほど砂を撒き散らした後、上陸戦のど真ん中で止まった。

「おい、みんな生きて…!」

不時着が成功したので、先任操縦者は二人の方へ視線を向けて無事を確認しようとした途端、流れ弾を頭に受け、呆気なく即死した。

「戦場のど真ん中に降りちまったようだ!」

シユンとファーススは、急いでシートベルトを外し、武器を取ってコクピットから出る。

レーダー手も、直ぐにコクピットから離れようとしたが、間に合わず、機銃の餌食となる。

貨物室へと辿り着いた二人は、直ぐにその場で動ける兵員を集め、外に出ようとする。

「動ける奴は俺達について来い！ 衛生兵は何人が残って負傷した者達の治療だ!! さあ、戦場へ行くぞ!!」

『フアー・サー!』

ファーススの掛け声で、負傷した者以外の兵員は、彼と共に激戦区な外へ出た。

シユンも共に激戦区に飛び出し、周囲の状況を見定める。

「ひでえ状況だ…」

彼が絶句したとおり、上陸部隊は酷い状況であった。あちらこちらで戦車が敵の対戦車攻撃に晒されて炎上し、歩兵は雨のような機銃による弾幕でバタバタと薙ぎ倒されている。浜辺や海は血で真赤に染

まり、死で溢れかえっていた。

更に酷いことに、士官や下士官がやられたのか、残った兵達は右往左往状態で混乱しており、海上にいる艦隊は誤射が恐くて艦砲射撃を出来ないで居る。

この状況を見れば一目瞭然だが、自分等は着陸地点から大分離れた場所へ”降下”してしまったので、シユンは部下達を残し、チエコのハリネズミで震えている若い女性兵士の元へ機銃を避けながら駆け付け、彼女に問い掛ける。

「おい！ どうなってる!?! お前の上官は何処だ!?!」

「ひっ、ヒィィ…ママ…」

問い掛けるが、怯えきつてこちらの問いが聞こえないようだ。

そんな恐慌状態の兵士に対しての有効方法は、頬を引っばたいて正気に戻すことだ。

それを知っているシユンは、早速実行し、数回ほど頬を叩いて彼女を何とか正気に戻した。

「あ、ああ…済みません」

「状況はどうなってる!?! お前の上官は何やってる!?!」

銃声や爆音に遮られないよう、強く耳元で叫べば、彼女は大声で答えた。

「分隊長も小隊長も中隊長も死にました!! 師団長は生きてる見たいですけど、自分では何がどうなってるか分かりません!!」

「そうか。こんな所にいたら、いずれか死ぬぞ!! クレーターとかに向かえ!!」

答えを聞いたシユンは、彼女にクレーターへ向かうように告げれば、墜落した巨人機に隠れているファースィスの元へ戻った。

「で、どうなってる!?!」

「みんな混乱してます! 士官と下士官がやられまくって大混乱だ!!」

「クソツ、酷い状況だな。戦術機を吹っ飛ばしたくらいじゃ、作戦は成功しないぞ。仕方がねえ、シユン、援護してやるから機銃を潰してこい!」

「はあ!? マジっすか!?!」

事の状態を説明すれば、ファーススはシユンに無茶な命令を出した。

「マジだ、お前以上に適任者が居ない。安心しろ、部下は突っ込ませない。お前だけが突っ込んで、あそこの機関銃トーチカを制圧しろ。そしたら俺達が、救援に向かう」

「保証は?」

「第三世代戦車を一人で潰したお前なら出来る。さあ、つべこべ言わずにあそこの塹壕まで行け!! 援護射撃の準備だ!」

勝手に手順を話した後、拒否権も無しにファーススは、援護射撃をするよう部下達に告げた。

シユンは嫌々と自分の銃であるSCAR^{スカー}の安全装置を外した後、援護射撃が始まるのを待った。

「援護射撃開始!!」

ファーススのその掛け声と共に、分隊支援火器ミニ軽機関銃のモデルの一つであるM249パラトレーパーと、M21狙撃銃、ブルパップ式突撃銃のタボールTAR-21による援護射撃が始まる。

これに一瞬、機銃の掃射が止んだが、直ぐに代わりの機銃手が現れ、再び掃射を始める。何名かの上陸部隊の兵士が取り憑こうとしていたが、再び掃射を受け、物言わぬ死体へと変わる。シユンは全力疾走で塹壕まで走り、近くで迫撃砲弾が着弾しようが、銃弾が掠めようが構わず走り、数秒ほどで塹壕に到達する。

「敵だ!!」

「いきなりかよ!!」

到着はした物の、運悪くそこに敵兵がおり、直ぐに89式小銃に似た自動小銃でシユンを撃ち殺そうとする。

だが、シユンは人より数倍ほど運動神経が優れており、反射神経も度重なる戦闘で研ぎ澄まされ、反応は敵兵よりも早かった。

7.62mm×51mm NATO弾を二発ほど胴体に撃ち込まれ、敵兵は鮮血を吹き出しながら死ぬ。

「はあ…:シヤアッ!」

少し息を整えた後、掛け声を上げ、既甘受トーチカの元へ向かった。見張りを撃ち殺して出入り口に張り付けば、ドアを数回ほどノックする。

『誰だ?』

中にいる兵士の一人が反応し、ドアを開けた。

開けた瞬間、敵に反撃させまいと、ドアノブを握って、利き手に拳銃を手をしている敵兵士を好かさず撃ち殺す。

「いつの間?」

「殺せ…」

流石に気付かれてしまい、銃座に付いていた敵兵二名が反撃しようとするが、シユンに二人揃ってあの世へ送られる。

一つめの機関銃トーチカを制圧した後、フアーシス達が残骸から出て来るのが見えた。

「うっし! 次行くか!」

上陸部隊の内陸部へ進出させるため、シユンは次なる機関銃トーチカの制圧に向かう。

狭い塹壕を進む中、機関銃陣地に辿り着いた。無論、そこには一個分隊ほどの敵兵等が張り付いており、上陸部隊へ向けて機関銃や重機関銃の弾を浴びせている。上陸をスムーズに進ませるなら、制圧しなければならぬ。

直ぐにシユンは取り掛かり、ポーチから破片手榴弾を一つ取り出し、それを陣地に向けて投げ込んだ。

「手榴弾だ!!」

そのまま爆発するかと思っただが、投げ込んだ手榴弾は何処かに捨てられ、無意味となった。

「投げ返すか普通!!」

そう敵兵等に突っ込みつつ、シユンは単独で機関銃陣地に突撃した。

「敵兵が居るぞ!!」

「撃ち殺せ!!」

一人を撃ち殺せば、直ぐに他の敵兵達が反撃に出ようと、ライフルや短機関銃を撃ってくる。

シユンは直ぐに遮蔽物へ身を隠し、片手でライフルを連射して牽制を仕掛ける。

コンクリートに弾が命中しなくなったのを確認すれば、ライフルを吊して腰の刀を抜き、一気に機銃陣地へ乗り込む。

「オラアー！」

一人を斬り殺した後、もう一人の頭を飛ばし、敵に反撃の隙を与えまいと次々と斬り捨てていく。

陣地内を敵兵等の鮮血で汚していく中、敵の一人の将校が軍刀を抜き、シユンに斬り掛かってきた。

「この野郎！」

「うお!?!」

直ぐに刃で受け止めるシユン。将校は黄色人種にしては確かに大柄であるが、シユンの方がずっと体格が大きく、力も強い。右足を敵将校の腹へ打ち込み、怯んだところを両断した。

胴体が斜めに切れ、血飛沫を上げながら倒れる。

同時にシユンは返り血を浴びたが、これで戦闘が終わったわけではないので、次なる目標へと向かう。

次の目標へ到着すれば、直ぐに出入り口に向けて手榴弾を投げ込み、爆発したところで突入し、生き残っている敵兵等を皆殺しにする。

制圧し終われば、直ぐにでも次の目標へ向かったが、敵の増援に阻まれた。

「居たぞー！ 撃ち殺せ!!」

敵の隊長からの指示で、敵兵等が一斉にシユンへ向けて銃弾を撃ち込んでくる。

シユンは即刻反撃するが、弾倉の中身の弾丸が尽きてしまう。

「あつ、誰かカバーしてくれねえのか！」

そう文句を垂れつつ、手慣れた手付きで再装填を終えた後、近付いてくる敵歩兵部隊に対しての反撃を行った。

数名ほど撃ち殺したところで、機関銃トリーカの弾幕が止んで前進してきた上陸部隊の兵士等が到着し、増援の敵歩兵部隊へ向けて攻撃する。

シユンが加勢すれば、敵歩兵は退却を始めた。

「ありがとなー！」

「ど、どうもです…！」

味方の女性兵士等に礼を言った後、シユンは次なる目標に向け、塹壕内を走った。

そのまま走っていれば、抵抗拠点の出入り口に辿り着く。

「俺一人だけか？」

周囲を見渡し、フアーシスも部下達も居ない事が分かれば、最後のトーチカ機関銃の元へ向かおうとした。

だが、最後は上陸部隊の誰かが潰してくれたようで、チェコのハリネズミや、戦車の残骸、砲撃で出来たクレーターに隠れていた上陸部隊の将兵等が一斉に押し寄せてくる。

地雷原などがあるようだが、生き残っている工兵がC4爆弾を投げ込んで爆破処分して、強行突破している。

更には第二波か第三波か知らないが、大量の上陸用舟艇が浜辺に辿り着き、タラップが降りて多数の将兵が上陸する。

「味方は多そうだ」

そう傾れ込んでくる上陸部隊の将兵等を見て、抵抗拠点へ入ろうとした。

「退いてー！」

だが、入る前に上陸してきた兵士等がシユンを押し退けて、抵抗拠点へ乗り込む。

後へ続いて入ろうとしたが、凄まじい銃声が鳴り響き、即座に遮蔽物へ身を隠し、髭剃り用の鏡で様子を確かめる。

「侵入防止用か…余計なもの取り付けやがって」

壁の銃眼に設置された機関銃を見て、悪態をつきつつ、死んでいる味方の兵士から煙幕手榴弾を拝借した後、安全装置を外し、銃眼へ向けて投げ込んだ。

「煙幕か!？」

敵の機関銃手は混乱して、機銃を乱射し始めた。見当違いなところを撃っているので、床を這いずりながら、銃眼へと接近する。這いず

る音は銃声で掻き消されているので、相手に気付かれずに銃眼の側まで接近できた。

敵はシュンが直ぐ側まで近付いたことに気付かず、彼が手にしたナイフを喉に突き刺され、自分の血で溺れながらあの世へと旅だった。死体からナイフを抜いた後、一気に外まで出ようと内陸部へ上がる。内部へと入っていくが、機関銃トーチカがやられた時点で陥落したも同然なのか、持ちきれない装備は破壊して退却した後だった。

すんなりと内陸部へ続くドアに辿り着き、そのドアのドアノブを片手で握り、利き手に銃を持ちつつ開けた。

「敵は退却か…」

トラックやトレーラーに乗って逃げていく日ノ本の帝国軍を見て、シュンはそこに腰を下ろし、水筒を取り出して水を飲んだ。

「おい、シュン！ お前の方が早いな！」

「中佐、一体何処で道草食ってたんで？」

遅れてやって来たファースス達に、シュンは嫌な表情を浮かべながら問い掛ける。そんな部下に嫌がられているファーススも、からかうような感じで答える。

「ああ、ちよつとばかし大砲を片付けるのに時間が掛かっただけだ。それと、パワードスーツを一台スクラップにした。どうだ、凄いだろ？」

「パワードスーツね。なんか楽な感じがしたのはそれですかい？」

「まあ、多分…そうだ…」

自分に無理な命令を敷いた上官に対し、報いを受けたと思つて微笑んだ後、近くの壁にもたれ掛かり、仮眠を取ろうとする。

「済みません中佐殿、十分くらい寝るので、後で起こしてくれませんか？」

「ああ、好きにしろ！」

上官に起こすように頼んだ後、シュンは自分だけ眠りの世界へと向かった。

「ん？ 夢か…」

一連の出来事は、どうやらシユンの懐かしい夢であった。

自室のベッドの上で目覚めた彼は、頭を搔きつつ、床に両脚を着け、太い両膝に似合う太い両腕を置いた。

「懐かしい夢だな…」

どうやら過去の出来事らしく、今のシユンはワルキューレを除隊しており、現在はその退職金で小さな孤児院を営んでいる。

彼がワルキューレを除隊した原因は、シユンか元同僚以外しか知り得ないことである。

「シユン兄ちゃん、起きてる？」

「おう、どうした？ お前等」

ドアを開けて、入ってきた幼い少年と少女に対し、シユンは優しく答える。

シユンの風貌は、幼い子供達からすれば怖がられる物だが、慣れているようで、親のように接している。

二人は不安な表情を浮かべながら、シユンに要望を告げた。

「眠れないの、お絵本読んで」

「ああ、仕方ねえな…兄ちゃんが読んでやるよ」

要望を聞いたシユンは、棚に置いてある時計を見た後、「仕方がない」と思っただけの二人の要望に応え、自室を後にした。

シユンはずっと孤児院の子供達と共に、平凡ないつもの日常を送れると信じていた。

死が身近にあった戦場とは違い、ここは銃声も鳴らず、犯罪も起きない程の平和その物で静かな辺境の村。

孤児院の子供達は親が死ぬか、捨てられて心が病んでいたが、シユンの必死な努力で、太陽よりも輝かしい笑顔を見せ、彼を父親と認識している。

何不自由ない暮らし。

金が足りなくなれば、除隊時に貰った“得物”を持ち、近くの街でいつも開催している裏闘技場に出れば良い。

生命の危機に晒されるが、孤児院の子供らのことを考えれば、決して負けることはない。

もちろん子供らには内緒だ、用事だと言って誤魔化している。

これで平穏な日常は保てる。シユンはそう信じていたが、その願いは不運にも打ち砕かれることとなる。そんな事を知らず、いつもの日常を過ごした。

無駄に人を殺す戦争物

地球統合連邦軍と名乗る異世界より侵攻してきた巨大な連合軍により、科学と魔法、騎士、ヴァイキング略奪者達の軍事同盟であるワルキューレは数個以上もの植民地世界を失った。

天と地の差もある物量を誇る連邦軍をワルキューレはなんとか侵攻を停止させたが、騎士や魔術師、ヴァイキングたちの領土は侵攻の矢面に立たされたため、連邦軍の支配下に置かれる。

幾度か奪還のために反撃を行うが、膠着状態となるだけで何の進展も無かった。そればかりか、連邦軍の再侵攻を食い止めるだけで手一杯だ。

新たな領土を獲得し、大規模な反攻作戦を行うべく、アガサ騎士団やメイソン騎士団を初めとした騎士と魔術師、ヴァイキング、下級兵士たちは、時空管理局と呼ばれるワルキューレよりも二十分の一は劣る勢力の世界へと無断で侵攻した。

その時空管理局も、連邦軍の敵方である反連邦惑星同盟軍による侵攻を受け、全力を持って退散させて疲弊しており、領土拡大を図る略奪者達の侵略を前に成す術が無かった。

時空管理局、第186管理外世界。

最初にワルキューレの騎士や魔術師、ヴァイキングを初めとした略奪者たちの侵攻を受けたのは、管理外の世界であった。

その世界は管理局の統治も受けず、平和に暮らしていたが、略奪者達により、破壊された。

「い、一体なんだこれは…!?!」

平和に暮らしていた木こりの男は、自分の村が侵略軍の騎士たち焼かれているのを見て驚愕する。

田畑は踏み荒らされ、家々は燃やされ、逆らった村人たちの屍があちらこちらに散らばっている。

これほど破壊したにも関わらず、対岸の方から無数の騎兵や歩兵が大挙して押し寄せて来る。この村を占領しているのは、先遣隊である

う。

「戦争とは、無縁と思っていたのに……」

戦争は別世界の事だと思って、自分等には関係ないと思っていたが、現実には自分の村が焼かれ、多数の侵略軍が押し寄せてきている。目の前の現実に絶望した男は、ただ両膝を地面につけ、打ちひしがれるしか無かった。

その村はまだマシンな方である。

ヴァイキングたちの侵略を受けた村は、蛮行に晒されていた。

強姦、略奪、虐殺など、沿岸の村々や都市に船で上陸したヴァイキングの大男たちは、鬼畜の所業を日常のように繰り返した。

「久しぶりの侵略と略奪だっ！ 野郎共！ 景気よくやれい!!」

『おおーっ!!』

久方ぶりの侵略と略奪に、ヴァイキングの男達は狂気乱舞し、蛮行を楽しんだ。

下級兵士たちもヴァイキングと同様に蛮行を行った。普段は捨て駒や弾除けとして消耗される哀れな兵士たちだ。

それが、占領した敵地なら何をしても良いと言われれば、どうなるか？

答えは簡単だ。全くお目に掛かれない女や子供たちを犯し、金品財宝、食料を奪い、男達を殺す。

僅かながらの自由を得た下級兵士たちは、ワルキューレの支配下では出来なかったことを心置きなく行った。

無論、この同盟軍と同じく異世界よりやって来たワルキューレの侵略者たちに対し、時空管理局は直ぐに対抗した。

だが、知りえない技術を持つ世界より攻めて来る敵に対する要である「軍」は、同盟軍との侵攻を退けた代償として、壊滅状態に近い損害を受けており、出動すらままならない状況であった。

侵攻を少しでも止めようと、時空管理局は苦し紛れに戦争には不向きな武装魔導士と次元航行部隊を送り込んだ。

そんな戦争には向かない治安維持部隊が、圧倒的な物量で迫る侵略軍を止めることは出来ず、女や子供は犯され、男達は皆殺しにされる

か、捕虜として労働させられた。

ちなみに、その「軍」と言う防衛組織は、特別に時空管理局が禁止する火薬を使う兵器、いわゆる質量兵器の使用が認められている。

それほどに時空管理局、自分等が知りえない技術や科学力、魔術で迫る敵が怖かったのだ。

第88管理世界。

ワルキューレの侵略軍は八個の管理世界、十個の管理外世界の占領に成功したが、快進撃はこの第88管理世界の侵攻で潰えた。

治安維持部隊と言えど、エリートは幾人か居る。優秀な戦略化による機動防御や必死の抵抗によって軍の再編は完了し、反撃の準備は整った。

元々、陸海空軍に宇宙軍から占領の為の予備戦力を貰えなかった騎士・魔術師・ヴァイキングと、随伴する下級兵士の連合軍は、一度の攻撃に失敗して反撃を受ければ、総崩れのように管理局の勢力内にある世界から撤退を始めた。

管理外世界でも負け始めた。管理外と言っても、地球と言う管理外世界のように軍隊を持って居る世界もある。文明が遅れていると油断しきってそこに攻め込んだ部隊は、手痛い仕打ちを受けて退却した。

もちろん、反撃を試みた。だが、一度崩れ去った士気は元に戻すのは至難の業だ。特にワルキューレに忠誠心も無い下級兵士たちは、我先へと逃げ出すか、降伏し始める。騎士と魔術師たちは面目を保つための暫しの戦闘を行った後に投降し始め、ヴァイキングは蛮勇に等しく戦い続けて死んだ。

軍の最新式の武器と高度な魔術による迎撃で総崩れとなり、真面に戦闘が行えない状況となる。

ある世界での戦場では、もはや虐殺としか言えない状況となっていた。

「下級兵士部隊が虐殺されております！」

「なに？ 何たるさままだ！ 直ぐに前進せよ！ 奴らごと踏み潰して

も構わん！」

無策に弾除けとして突っ込ませた下級兵士たちが、時空管理局の軍の反撃で虐殺されていた。

それを後方から見ていた騎士たちは、情けないと言って味方ごと踏み潰す勢いで騎兵突撃を掛ける。

だが、敵は槍や弓を持った農兵では無い。現代的な訓練を受けた兵士たちだ。ライフルを持ち、遮蔽物に身を隠して数の多さに任せて突っ込んで来た下級兵士たちを一方的に撃ち殺している。しかも強力なのを。

その虐殺される兵士たちの中に、ただ騎士が混ざっただけだ。一瞬にして、そこは死体置き場に早変わりになり、地面が真っ赤に染まり上がった。

騎士たちが身に付けている甲冑は、大口径のライフル弾まで防ぐ宇宙戦艦に使われる特殊な合金でできた物だが、管理局の軍の兵士たちが使うライフルの弾丸は防げなかった様子だ。

「退け！ 退けえ!!」

味方の下級兵士たちを踏み殺してでも突破しようとした騎兵隊であったが、単に殺されるばかりで無駄な損害を増やすだけだ。

退却しようとしたが、軍の兵士たちは容赦なく銃弾を撃ち込み、さらに死体の数を増やす。

「撃ち方止め！ 撃ち方止め!!」

指揮官が動いている敵兵が一人も居ないことを確認すれば、配下の兵士達に射撃中止命令を出し、生存者の探索を始めた。

「この一戦、我らに勝機あり！ 美しき戦乙女たちよ、我に続け!!」

一方、別の管理外世界での戦場では、増援としてやって来た女騎士団と砲兵連隊しか重装備の持たない歩兵師団の女兵士たちが、砲撃や空爆が終わった後、騎士団長である豪勢な甲冑を身に纏った女騎士の突撃命令を受け、狙撃兵や機関銃、砲撃の援護を受けつつ、先陣を切つて敵陣に突っ込んだ。

「突撃！ 突撃！ 損害に構わず前進!!」

同時に将校の笛が鳴り、続々と塹壕から飛び出して徒歩で敵陣を目指す。女騎士の指揮下に置かれた租の歩兵師団は、装甲車や軽装甲の戦闘車両すら持っていないのだ。

敵陣までの道筋は、無数の下級兵士や騎士、魔術師、ヴァイキングの死体で溢れており、地が真っ赤に染まる程であった。間にある小川も真っ赤に染まっていて、飲み水として使えない。

「斥候が射程距離に入ったぞ！ ありったけ撃て！」

そんな侵略軍の兵士達で死屍累々の平地を作り上げた管理外世界の軍隊は、攻め側に十字砲火が出来るように機関銃陣地を配置しており、大挙して押し寄せて来る敵歩兵部隊に向けて機関銃で放つ。

その機関銃は水冷式の物があれば、空冷式、人体を引く裂くほどの火力がある重機関銃、恐ろしい事に機関砲もある。しかも敵の砲火に晒されぬように巧みに隠しており、前を走っていた歩兵は周囲に転がる死体と同じように倒れるか、ズタズタに引き裂かれる。

彼女らを守る遮蔽物は、砲撃の影響でできたクレーターか周囲に転がっている死体ぐらいであり、そこに辿り着くまでに夥しい数の歩兵が死んでいく。

クレーターに辿り着いても、飛んでくる銃弾に振るえるだけだ。死体で作り上げた遮蔽物も、重機関銃や敵の迫撃砲による砲撃で吹き飛ばされる。

「ひっ…!？」

「止まるな！ 前進しろ!!」

クレーター内で振るえる一人の歩兵を斬り殺した女騎士団長は、直ぐに前進を再開するように脅し、自らも十字砲火の中を進んだ。

ヴァイツカース重機関銃を持った機関銃中隊が、積み上げた死体で作った即席の機関銃陣地を築くも、強力な重機関銃か機関砲、迫撃砲、榴弾砲による砲撃で吹き飛ばされる。

それでも損害に構わず前進を続けた女騎士団と歩兵師団であったが、最後の死体が倒れている場所から先を越えることなく、先に突撃して全滅した騎兵やヴァイキング、下級兵士らと同じく全滅する。

「止まる…」

「これ以上の前身は不可能だ！ 後退せよ！ 後退!!」

突撃を先導していた騎士団長が、狙撃で首を撃たれて即死すれば、残った者達は撤退を始めた。

そんな逃げる女兵士たちの背中を、機関銃陣地は容赦なく機銃掃射を浴びせ、女騎士団や歩兵師団に更なる出血を与える。

負傷した味方の兵士を抱き抱え、共に逃げようとする女兵士でさえ、容赦なく銃弾を浴びせる。地を這って味方の陣地まで逃げようとする者でさえ、機関銃陣地に居る兵士たちは容赦なく撃ち殺した。

「撃ち方止め！ 撃ち方止め!!」

敵の指揮官が射撃中止命令を出すころには、動いているのはほんの僅かであった。

「なあ、まだ生きてる奴は居るかな？ みんな女だぜ、数日前に皆殺しにしたクソ共とは違う」

「馬鹿、塹壕から出るなって言われてるだろ？ 出られるのは工兵だけだが、奴らも監視されている。女の回収は不可能だ。もうじき、敵の砲撃か空爆が始まる」

塹壕内に居る兵士たちは、ここから出てまだ息のある女性兵士らを犯そうと考えたが、下士官に止められ、塹壕内に戻る。

数秒後、ワルキューレ空軍の爆撃機による空爆が行われた。

それから数週間後、ワルキューレの侵略軍は度重なる敗退と損害により、管理局の領内へと撤退を余儀なくされた。

これでワルキューレと管理局の戦争は終わるだろうと思っていたが、時空管理局とその管理外世界の上層部は報復を望んでおり、戦力が整い次第、直ぐにワルキューレの領内に報復のための侵攻を開始した。実際は、報復の名を借りた侵略戦争であるが。

初めは四世界を手中に収め、そこでワルキューレと停戦協定を結ぶ予定であったが、管理外世界の軍事同盟は欲が眩み、更なる侵攻を行った。

時空管理局はその軍事同盟の暴走は止められず、ただ指をくわえて自分等が占領した四つの世界を守るだけだ。

そして軍事同盟は、二級戦部隊しか居ない二つの世界を占領下に収め、先に侵攻したワルキューレの侵略軍と同じく略奪と蛮行を行い、更に勢力を伸ばそうと、三つ目の世界の支配に乗り出した。

暴走する軍事同盟の侵略軍に対し、ワルキューレは浄土作戦を遂行し、敵の補給路に大打撃を与えた。

数日後、調子に乗り過ぎて奥まで引き込まれた軍事同盟は、先の方ルキューレの侵略軍と同じように瓦解した。

浄土作戦を行ったワルキューレは、寝床や食料も、人すら残さなかつた。更には敵の補給部隊を奇襲し、弾薬と物資不足で疲弊させて戦意を奪う。

連邦に向けていた機動兵器を保有する部隊を除くある程度の戦力を振り向けた反攻作戦も行われ、一瞬にして軍事同盟の侵略軍は壊滅するか、軍団ごとに投降する。

この瓦解で、占領した世界を奪い返され、更に戦力は再生不可能な程の損害を受け、軍事同盟は壊滅した。

軍事同盟が壊滅したことで、管理局の戦意も下がり、早々に二つの世界の防衛を放棄して撤退する。

元々、管理局の傘下の軍は侵略に乗る気では無かつた。二つの世界さえ停戦協定までに占領していれば良かったので、早々に防衛態勢に入った。

して、何としても停戦協定までに占領された二つの世界を取り返したいワルキューレは、敗残兵で構成された部隊と、大量の捕虜の連邦兵までを増員して奪還を行おうとした。

「降りろ！ 侵略者共!!」

前線近くの駅では、列車の貨車より大勢の連邦兵の捕虜を降ろしていた。

彼らの手には銃は無く、周囲には監視のための短機関銃を持った兵士らが前線へ向かうように誘導する。

すぐ横では、重傷な負傷兵を詰め込むため、医療班が待機している。列車から強制的に降ろされた連邦兵の捕虜達は何も分ならず、続々

と前線へと向かっていく。

「止まれ！ 今より貴様らに武器を支給する！ 直ちに受領し、命令あるまで待機せよ！」

先頭の集団が辿り着けば、武器を受け取るように告げられた。

その武器とは、一般的なライフルでは無く、なんと簡素な槍であった。渡された槍を見た連邦兵の捕虜は、なぜライフルではないかという質問。

「おい、なんで槍なんだ!? 俺は少尉だぞ！ ライフルは何所だ!?!」

「黙れ能無し！ 早く配置に着け！」

問い質した兵士は少尉であったらしいが、投降した連邦軍兵士は、兵も下士官、士官を含めて膨大であったために、優秀な者や連邦軍に反抗的な者だけを建設部隊や炭鉱夫、工場勤務、もしくは再教育して下級兵士らの指揮官や、鹵獲した装備なので編成した反連邦十字軍の一員にした。

しかし、志願者や優秀な人材が少な過ぎ、残った大勢を食わせて行くのが面倒なので、余分な人材を下級兵士に強制的に入れるか、今のようは無駄に殺すために碌な武器も持たせずに前線へ送っている。

碌な武器も持たされない彼らは、命令があるまで銃を持った兵士たちに監視されながら待った。

「この中で、一番強い者は居るか!?!」

同じく弾除けの為に連邦兵の捕虜達と共に突撃させられる下級兵士たちの元に、銃を持った数名の兵士と将校がやって来た。

彼らは下級兵士たちの中で、最も強い者を捕虜突撃部隊の指揮官にしようと言うのだ。

薄汚い男が、直ぐに大剣を磨いているアジア系の大男に指差す。

「あ、あいつだ！ 俺たちの隊の中で一番あの大剣をぶん回す男が強い！ 管理局の魔導士を十人も殺してる！ この前の反撃じゃ、連中の兵隊を何十人も斬り殺した!!」

指差した方向に居る大剣を磨いている大男の元へ、将校は近付いて顔を見た。

「ほう、こいつは面白い。元特殊部隊の瀬戸シユン曹長では無いか。

いや、今はへまをやらかして上等兵まで降格したか」

知り合いであつたらしく、この下級兵士に降格された経緯を笑いながら語る。

それから自分の部下たちに、瀬戸シユンのようにミスをしないうように告げる。

「貴様たち、良く見ておけ！ この男は特殊作戦中に、勝手な判断をして重要な特殊作戦を失敗に追い込んだ！ お前たちも特殊部隊に入れば、交戦規定をきちんと守れ！ 良いな？」

『了解であります！』

「わざわざそんなことを言いに来たのか」

「ふん、何とでも言え。それよりもお前に昇格祝いがある、喜べ、千人編成の大隊長だ！ とつ、言つても大隊本部も無い侵略者の捕虜千人だな」

部下たちの返答を見た後、シユンは自分を咎めるためにわざわざ来たのかと毒づく。

それから指揮官は、シユンに捕虜千人の隊長になつたと知らせれば、他の大隊長を決めるために回つた。

大隊長、約三百五十か六百人以上の兵員を持つクラスだ。主に四個中隊で編成され、指揮系統も複雑化するので、それらを管理し、指令を円滑にするための通信手段として大隊本部を構える。

だが、シユンが率いる捕虜大隊にはそれらの指揮系統を束ねる通信設備が整つた大隊本部は無く、ただ敵に弾薬を消耗させるための捨て駒だ。

不本意で大隊長を命ぜられたシユンは、逆らつても意味が無いので、命令に従つて大隊長をすることに決めた。

数時間後、捕虜全員に槍が行き渡り、彼らの長である形だけの大隊長と連隊長が決まつた所で、強固な防衛網を敷いた管理局の軍が占領した要塞への攻撃を開始した。

「総員突撃用意！ これより、管理局の防衛戦を突破する！ 各部隊、援護砲撃ならび空爆の終了後、損害に構わず前進せよ！」

「ふ、ふざけるな！ こつちはライフルが殆ど無いんだぞ！ こんな

ふざけた作戦に付き合つてられるか!!」

一人が逃げ出したが、彼らの後から突撃するWWIIレベルのイギリス機甲部隊で編成された機甲師団に属する狙撃兵に頭を撃ち抜かれた。

『捕虜諸君、貴様たちに逃げ場など無い。貴様たちは上層部から見捨てられているのだ。彼らは捕虜交換交渉に応じなかった。つまり捨て駒なのだ。自由が欲しくば、我がワルキューレの市民権を得るために、敵陣へ突撃し、第821機甲師団と939機甲師団の露払いをするのだ。無事に敵陣を突破し、露払いをした者には褒美として市民権を与えよう』

続けて逃げ出した三名を撃ち殺しつつ、指揮官は勝利の暁には市民権を保証すると演説した。

だが、誰も聞く耳は持っていない。シユンは動揺しきつてパニックになる連邦の捕虜達を眺め、他の下級兵士等と共に突撃命令を待った。

砲撃と空爆が終われば、一斉に突撃ラツパや笛が鳴らされ、下級兵士たちは戸惑う連邦の捕虜達を押しながら突撃を開始する。

「突撃しろ！ 突撃せぬ場合は射殺する！ 行け!!」

笛やラツパが鳴つても前進しない連邦の捕虜達に、指揮官は一人を拳銃で撃ち殺し、無理やり前進させる。

下級兵士らもまた一人を銃剣で突き刺して殺し、突撃を促す。これに逃げれば死ぬと分かったのか、捕虜達は槍を持って敵要塞に突撃した。

攻撃目標の要塞は元々ワルキューレの物で、長年、戦争が起きていないために放棄されていたが、管理局の侵攻を受けて占領された際、要塞として機能を再開し、作ったワルキューレ相手に猛威を振るっている。

要塞には多数の榴弾砲と機関銃、対空砲が備えられており、古い榴弾砲や高射砲を撤去してロケット弾や対空ミサイルが代わりに搭載されている。要塞は陸にあり、更に防衛に適した場所に建てられているので、攻め落とすのは容易では無い。

榴弾でも空爆でも崩すことが出来ないその鉄壁の要塞を、二百万の捕虜と下級兵士三個師団、機甲二個師団、重砲兵三個連隊で攻め落とせと言うのだ。無茶にも程がある。

「くそっ、どうにでもなれえ!!」

「あそこに行けば、自由になれるんだ！ 行つて自由を取り戻してやる!!」

自暴自棄となった者や行けば自由になれると信じた捕虜の連邦兵たちは、群衆となつて要塞へと突撃した。

地雷原は砲撃と空爆である程度は片付けたが、まだいくつか残つており、先に突つ込んだ集団は地雷を踏んで吹き飛ぶ。吹き飛んで行く友軍の兵士を見た一人が逃げ出そうとしたが、続々と後ろから押し寄せて来る人並みに踏み潰されてしまう。

数百名近くが地雷原で死亡するか、手足を失つて負傷したが、誰も解放せず、ただ自由への道である要塞へと突撃するばかりだ。

対戦車地雷は人の重さでは爆発しなかったが、余りにも大勢の人間が通る所為で一つが戦車が通つたと勘違いして爆発する。

「助けて…助けて…」

助けを求める者が居たが、敵から鹵獲した装備や死んだ騎士より剥ぎ取つた甲冑などを身に纏つた重武装な下級兵士たちに踏み潰される。

僅かながらの犠牲で地雷原を突破した要塞突撃混成部隊であったが、次は機銃掃射と防衛砲撃であった。

管理局の軍は、現代の軍隊のように贅沢な装備を持っており、機銃掃射は無数の弾を発射するチェーンガン、あるいはミニガンを使つている。機関銃も大口徑レベルだ。

そんな重装備の要塞に戦闘車両の支援も無しに生身で突つ込むので、射程距離に入った瞬間に何百人もの人間が数秒足らずで死んだ。まるで虐殺だ。

ある者は身体を裂かれ、ある者は痛みを感じることなく死ぬ。数秒で地獄絵図が描かれた。

「こんな作戦をおつたてた奴の気が知れないぜ！」

遮蔽物に隠れたシユンは、恐ろしい数の人間が死んでいく様を見て、このずさんな作戦を強行した陸軍上層部に腹を立てる。

事実、前に出るべき機甲戦力は対戦車ミサイルや地雷に恐怖を覚えたのか、捕虜軍集団の後ろからついて来ている。これでは突撃させた捕虜が無駄死にである。無駄に多い捕虜を敵に殺させて楽をしようとするワルキューレの狙いだが。

数分足らずで夥しい数の捕虜が死んでいく中、シユンは血で赤く染まり上がった大地を這いずりながら敵陣へと進んだ。

その間にも将校や下士官も含む捕虜の連邦兵達は無茶な突撃を行い、死んでいく。中には精神崩壊を起こして幼児退行したり、恐怖の余り絶叫し続ける者もいた。

敵軍の将兵らは何人たりとも絶対に通すなと命令されているのか、機関銃やミニガンの引き金を止めることなく引き続け、照準器に映る敵兵に銃弾を浴びせる。手を挙げていようと絶望の余り立ち尽くして居ようと関係なしだ。

突撃した大勢の捕虜達が次々と死んでいく間、シユンは要塞付近まで辿り着いた。

「大丈夫だ、訓練を思い出せ」

頭上では絶え間なく銃弾が飛んでくるので、少しでも頭を上げれば粉微塵に吹き飛ぶことだろう。

要塞を死んだ将校より頂いた双眼鏡で見れば、ミサイルの照準の為にレーザーか、無線機で砲撃要請をしたくなつたが、シユンの持ち物にはその類はあらず、生憎と精密攻撃が出来る兵器は全て対連邦戦線に持っていかれたのか、この戦線には無かった。あるとすれば、旧式の榴弾砲と重砲だけだ。しかし、砲撃を要請する無線機も持っていない。

「気付くなよ…」

それらの持ち物が支給されなかったことに腹を立てつつ、敵が正面に集中している間に、シユンは地面を這いずりながら要塞へと向かった。

「? 弾詰まりか銃身が過熱したか。だが、予備は用意しているな」

地面を這いずっている最中、機銃掃射が止んだが、要塞司令官は防衛戦が得意なようだ。代わりの防衛射撃として、突撃銃や分隊支援火器による掃射が再開される。あの重機関銃やミニガンによる掃射よりは弱い、それでも敵を寄せ付けないような弾幕だ。弾幕の中には、魔弾のような物も見える。どうやら局員も動員しているらしい。こちら側の前進は続けられているようだが、以前に捕虜と下級兵士たちは死に続けている。

手榴弾が届く距離まであと数mと言う所で、運良くここまで来れた数名の捕虜と下級兵士たちがシユンの元へやって来た。

「こいつは虐殺だ！ 投降しようぜ！」

「なんだ、怖気づいたか？ 奴らは捕虜を殺すぞ。俺たちに食わす飯は無いと言つてな」

「ああ、止めておこう。連邦の奴らも、捕虜を殺すつて言うしな。あいつ等は捕虜の扱いすら知らないらしい」

やってくるなり一人の下級兵士は管理局に投降しようと言つて来る。

そんな兵士に対し、シユンは管理局は捕虜を丁重に扱わないと言えば、髭を生やした丸刈りの男も捕虜の連邦兵を見ながら連邦軍も捕虜を取らないことを告げる。

これに反論しているつもりなのか、反連邦十字軍や労働者、下級兵士行きから外された連邦軍の将校が口を開く。

「ふん、貴様ら蛮族は我が統合連邦には不必要な物だ。我が連邦軍の捕虜をこのような作戦に投入させる事態が実に蛮族だ。このワイルドキヤットめ」

「でっ、なんでその連邦つてのは捕虜交換の交渉をしないんだ？ お前らが大切なら、交渉でもやって助けようとするはずだが」

「そ、それは…」

「まっ、槍だけ持たされて突撃させられている連中と同じく消耗品さ。消耗品同士、仲良くやろうや」

「お、俺は…消耗品なんかじゃ…」

自分等を蛮族と蔑む連邦軍の将校に対し、シユンがなんで捕虜交換

の交渉に来ないんだと問えば、捕虜である将校は何も言い返せなかった。

彼の階級は大佐であるが、親の七光りで出世したようで、軍事的才能が無いらしく、それに脱走の計画も練られないなのか、兵や下士官、他の無能な将校と主に収容所に入れられたようだ。ちなみに、無能であれば将官階級も同じ扱いであり、将軍となる者でさえも槍を持たされて突撃させられている。

そんな哀れな大佐に、シユンは肩を叩いて敵が再装填を終える前に、仲間たちと共に手榴弾が届く距離まで向かった。

「ついてくるのは良いが見付かるなよ。もう再装填を終えて大虐殺を再開したところだ」

地面を這いながら要塞へと向かう中、重機関銃や機関砲、ミニガンの再装填を終えたのか、再び切り裂くような銃声が鳴り響き、無茶な突撃を行う捕虜の連邦兵達の虐殺を再開した。

大勢の味方が殺され続けているが、先ほどと同じか、上空を飛んでいる敵のガンシップも突撃して来る集団に集中しており、地面を這わずにいるシユン達を見向きもしない。

その隙にシユン達は要塞に接近することに成功し、手榴弾の安全ピンを引き抜いてミニガンを掃射している銃眼へと投げ込んだ。

『グレネード!!』

叫び声が上がった後、投げ込んだ場所から粉塵が見えた。

機銃手は殺せなかったようだが、それでもミニガンの無力化に成功した。

「よし、一つ潰した！ 残りも潰して前進を再開させるぞ！」

「応っ！」

一つを潰した所で、その銃眼に乗り込み、残りの機銃の排除を行おうとした。

シユンが合図を出せば、奇跡的に十字砲火を突破した少数の下級兵士と捕虜達は銃眼へと雪崩れ込む。

流石にそこから敵兵が雪崩れ込むことを予期していたのか、管理局の軍の兵士らは、手にしている最新式のバトルライフルやブルパップ

ライフルを撃ち込んで数名を撃ち殺す。

「野郎！」

六名ほどが殺された所で、シユンは中国製のAKである56式自動歩槍を片手で撃ち込んだ。

管理局の軍の将兵はライフル弾を防ぐ特殊な繊維でできている防弾チョッキを着ているため、殆どが外れたが、完全防備とはいかないのか、一人が隙間に弾丸を受けて倒れる。

「衛生兵！」

一人が倒れば、敵兵等は戦友を抱えて遮蔽物まで退く。

この隙を逃さず、シユンは突撃銃を撃ちながらもつと入ってくるように叫んだ。

「入って来い！ 一気に乗り込むぞ!!」

それに合わせ、続々とシユンが入った場所から下級兵士と捕虜が要塞内へと侵入していく。

要塞に入った敵兵等に対し、管理局の軍は予備兵力を向けて対応に当たるが、一つの射線が減ったことで、侵入して来る敵兵の数が多くなり、退き気味になる。

勢いに乗ったシユン達は、機関銃陣地やミニガンを潰していき、捕虜の軍集団の前進を支援する。

六つ目の火点を潰した後、七つ目の陣地を攻撃しようとしたが、そこに後退した者達が防御線を張っており、潰そうと群がって来る集団に向けてライフルや分隊支援火器を撃ち込んで来る。

「流石に近付けないか」

味方が撃ち殺されていく中、シユンは遮蔽物に身を隠してチャンスを窺う。

すぐ隣で、直ぐに死ぬかと思っていた大佐が敵兵のバトルライフルを弄くりまわしていた。

「な、なんで撃てないんだ!? どうなっている!?!」

銃が撃てないことを慌てているようだ。直ぐに歴戦の下級兵士が、管理局の軍が使用する銃が他の者に使用できない理由を明かす。

「連中の使う銃はどれもハイテクだ。持ち主しか撃てない仕様になっ

ている。おたくらの軍隊もそうじゃないのか？」

「ID登録の銃だど?! ISAじゃあるまいし!」

管理局の軍が使う銃は、どれも兵士の個人IDが搭載されており、その者以外に撃てぬ仕様となっている。安全装置も同様で、他者が使うにはIDを解除するか、分解してID装置を取り出す必要がある。

他の捕虜の連邦兵や下級兵士たちは、そのことを知らないらしく、銃を弄っている間に撃ち殺された。

「まあ、ろくでもねえことは確かだ。もう直ぐで機甲部隊が到着するはずだ。それまで耐えるぞ」

次々と突撃して殺されていく味方の兵士たちを他所に、シユンは突撃銃の再装填を終えてから射撃を再開した。

数分後、恐ろしい数の捕虜の連邦兵達の屍を越え、一切の損害が無い機甲部隊が要塞内へ入った。迫撃砲やロケット弾の射程内に入ったため、砲弾やロケット弾の雨を浴びせられる。

だが、機甲部隊も砲の射程内に要塞を収めたので、火点を潰しながら要塞内へと入ろうとする。

「よし、吹っ飛んだぞ! 前進だ!!」

ミニガンを数台ほど配置した七つ目の機関銃陣地が吹き飛んだので、シユン達は前進を再開した。

敵は既に第一防衛線を放棄したのか、第二防衛線へと重機関銃やミニガンを抱え移動して既に迎撃の準備を整え、再び槍しか持たない捕虜達を虐殺していた。

「駄目だ! 要塞の外で半分以上は死んだんだぞ! もうやってられるか!!」

また重機関銃やミニガンによる掃射が再開されたので、複数の捕虜が逃げ出そうとしたが、後からやって来たワルキューレの機甲部隊とその随伴する歩兵部隊に残らず撃ち殺される。

「下がるな! 前進せよ!」

歩兵隊の将校はエンフィールドN02回転式拳銃で逃げる捕虜の連邦兵を撃ち殺しつつ、前進を続けるように脅した。

なおも捕虜は死に続けているが、敵の火力は減ってこちらに機甲部

隊が居るので、マシンな方だ。

前進するチャーチル歩兵戦車やクロムウエル巡航戦車を盾にしつつ、無数の重機関銃やミニガンを掃射する火点を一つずつ潰していく。

流石に突っ込んで来る二百万相当の敵兵の相手に弾薬をかなり消耗したのか、抵抗は少なかった。

敵は使い魔や様々な魔法で押し寄せて来る捕虜の連邦兵を殺し続けたが、機甲部隊の存在もあり、手を挙げて降伏する者が現れる。

「うわあああ!!」

投降した敵兵に対し、数名の捕虜の連邦兵は槍を突き刺そうとしたが、ステン短機関銃に全員が撃ち殺される。

「あ、ありがとう」

「早く来なさい!」

数名の敵兵を捕虜にした歩兵隊は、彼らを連れて所属している大隊本部へと連れて帰る。

抵抗拠点は幾つか潰したが、敵の師団本部か軍団本部なのか、抵抗は強固な物であった。籠城のために弾薬や食料に水が運び込まれていたのか、針鼠のような要塞となっていた。他にも使い魔を使って抵抗している局員や召喚魔導士も居る。

そこへ無数の捕虜の連邦兵達が突撃を行うが、外と同じように死にまくるばかりだ。

一体、どれくらいの間がこの一度の戦闘で死んだのだろうか？

おそらく敵軍の将兵よりも死んでいる。周辺が足の踏み場も無いほどの死体で溢れかえっている。

「一体、何人死んでんだ?」

「さあ、おそらく最高記録だろう」

突撃する捕虜の連邦兵を殺し回る局員の使い魔であるゴーレムを見たシユンは、背中の大剣を抜いてこの戦闘の戦死者を名も分からぬ髭面のハンマーを持った同僚に問うた。

無論、自分と同じ無学者の下級兵に分かるはずもなく、彼は最高記録を抜いたと答え、おお振りのハンマーを持ってシユンと共にゴーレ

ムに立ち向かう。

数名が吹き飛ばされ、あるいは拳を打ち込まれてミンチになるかして、シユンとハンマー持ちはゴーレムにそれぞれの得物を叩き込んだ。

シユンの大剣は突き刺さった程度であったが、ハンマー持ちはひび割れを入れることが出来た。

ゴーレムが反撃する前に、二人は急いで離れて物陰に隠れ、次の攻撃に備える。

「ほら、やっぱ大剣じゃ無理だろう。大人しく打撃物か、両手剣に変えるんだな」

「確かに考えたことがあるが、こいつが身に染みててな、他の武器じゃどうにも」

「ああ、分かるな。その気持ちは。命賭けてる職業じゃ、慣れた武器が一番いいもんな！」

物陰に隠れたハンマー持ちは、シユンに大剣から他の武器に変えないのかと問うが、彼はこの武器が一番慣れていると答えた。

確かに、一歩間違えれば命とりな戦場で、慣れ親しんだ武器はどの戦友よりも心強い味方だ。

シユンの答えに賛同しつつ、ハンマー持ちは回り込んで来た召喚士が魔法で召還した使い魔のハイエナを叩き殺した。シユンもまた自分の方に来たハイエナを大剣で惨殺して、捕虜の連邦兵を殺し回るゴーレムに再び立ち向かう。

振り下ろされた拳を躲したシユンは、つなぎ目に向けて大剣の刃を叩き込んでゴーレムの右手を切断した。

「トドメは俺だ！」

ハンマー持ちはゴーレムの巨体を支えている左足にハンマーを叩き込んでバランスを崩させれば、ゴーレムから転落した主の頭に向けてハンマーを叩き込んで殺害した。

主の頭はスイカのように潰れ、主を失ったゴーレムは、砂のように崩れ落ち始める。

動物の類は主が死んでも戦い続けるが、ゴーレムのような何らかの

物質より作られた使い魔は、主が死ねば自動的に機能を停止して元に戻るのだ。

「たくつ、戦車や戦闘爆撃機はなにやってんだ？俺らが全部やらねえと駄目なのか？」

ゴーレムを倒した後、それらを倒すための戦車部隊や戦闘爆撃機が何所にも居ないことにシユンは苛立ち、続けて味方の兵を殺し回っている召喚された使い魔の排除に向かった。

虎を初めとした獰猛な動物や魔物の類の使い魔を自分の得物で殺しつつ、同じく殺し回るハンマー使いに名前を問うた。

「そう言えば、名前を聞いてなかったな。名前は？」

「俺か？俺はズールだ。元々は突撃歩兵師団に居た。キレて上官の頭をハンマーで叩き潰したら、下級兵送りになった」

「そうかい。俺は命令違反で下級兵士送りだ。囚人部隊送りの方が良かったな」

ハンマー使いの名はズールで、下級兵士になった経緯は上官の頭をハンマーで叩き潰したからだ。普通なら銃殺物だが、下級兵士送りになっただけ幸運だろう。

向かって来る小型や中型の使い魔を殺しつつ、シユンも下級兵士になった経緯を話した。囚人部隊の方が良かったと、蛇の使い魔を噛み付いて素手で引き千切ってからぼやく。

だが、誰かも分からぬ二振りのメイスを持ったスキンヘッドの大男に囚人部隊は酷いと聞いても居ないのに告げる。

「囚人部隊は止しておけ。穴掘りばかりされるぞ」

「そう言えばそうだな」

「誰だお前」

メイス使いにズールは見たことがあるのか、納得したが、変な男が割って入って来たので、シユンは名前を問う。

その男は名前も答えず、ひたすら使い魔や逃げ遅れた局員を殺し続けていた。戦闘後、シユンはようやく彼の名を知る事となる。

『嫌だ！死にたくない!!』

局員や軍の兵士、使い魔を殺し続ける中、捕虜の連邦兵達が一斉に

逃げ出して来た。

「なんだ、ドラゴンでも現れたか？」

逃げ出す連邦兵達を見て、シユンは女の局員の屍に突き刺さった大剣の刃を引き抜き、使い魔のドラゴンだと思った。

だが、逃げる連邦兵達の頭上に落ちて来た落雷で、雷の魔法を使うドラゴンと判断して、同じく感付いた下級兵士等と共に屋根のある場所へ向かう。

「電撃竜か？」

「いや、違う。グリフィンだ。初めて生で見たぜ」

先のメイス使いがカウボーイハットの中年男に問えば、彼はグリフィンだと答えた。

中年男の言う通り、そこにグリフィンが居た。背中に主であろうか、女の魔導士が跨っており、自分の得意な雷魔法で逃げ回る連邦兵や下級兵士らが乗るBT-7戦車やT-26軽戦車を破壊しまくっていた。

「空軍は何やってんだ？」

大剣を背中に背負い、56式自動歩槍に切り替えたシユンは、空を飛ぶ使い魔を排除できる戦闘機や戦闘爆撃機は何所に行ったのかとぼやき始める。

航空隊はジェット戦闘機は全て対連邦戦線に回されているためか、レシプロ航空機ばかりであり、地上か空を飛ぶ使い魔に下級兵士らに配備されている複葉機と共に次々と落とされていた。

「やるしかねえな」

「ああ、やるしかねえ。死んでいる奴から銃を集めよう。女共はあてにならない」

あのグリフィンを倒すのは自分たちしか居ないと判断して、シユンを含める熟練の下級兵士たちは銃を集めた。グリフィンの主であるあの女魔導士を撃ち殺すのだ。それなら機甲師団に属する歩兵連隊の狙撃兵の仕事であるが、ここに機甲師団に属する車両も兵も見えなかった。

集めた銃で、空を飛んでいるグリフィンに向けてひたすら一斉射撃

を浴びせるが、バリアジャケットや魔法の盾で守られているのか、グリフィンには当たらず、乗っている魔導士が放つ雷魔法で次々と殺されていく。

「戦車は何所だ!？」

「要塞本部の攻撃にでもいつてるんだろう! 煙幕はあるか!？」

味方次々と殺されていく中、スキンヘッドの男は戦車が何所に行つたのかを問えば、シユンは要塞本部の攻撃に向かったと答え、誰か煙幕を持って居る物が居ないか問うた。

これに、ズールは腰に吊るしてある煙幕手榴弾を取って、自分が持って居ると大声で応える。

「俺が持つてるぞ! これで十分か!？」

「そいつで十分だ! 投げ込んで動きを隠す!」

シユンに言われた通り、煙幕手榴弾のピンを抜いて煙幕を撒いた。煙が撒かれる中、十分に煙が充満したところで、シユンは死んでいく下級兵より回収した閃光手榴弾を手にとって煙の中へと飛び込んだ。それから安全ピンを外し、グリフィンの頭上の上に来て爆発するように計算してから投げる。

充満した煙はグリフィンの羽ばたきで起こした強風で晴らされるが、シユンが投げ込んだ閃光手榴弾はグリフィンの頭上で爆発し、乗り手の女魔導士と使い魔のグリフィンの目が眩む。

この時を待っていたのか、シユンはメイス持ちが来て刀身に片足を付けたところで、思いつ切り力を込めてグリフィンに向けて振る。

振られた勢いで飛んだメイス持ちはグリフィンに掴まり、そこから一気に乗り上げ、持って居るメイスで乗り手に殴り掛かる。

殴り掛かって来たメイス持ちに、乗り手である女魔導士は抵抗したが、白兵に優れるスキンヘッドの男に敵うはずがなく、グリフィンから叩き落とされた。

乗り手が叩き落とされたことで、乗っているメイス持ちを振り落とそうとするグリフィンだが、後頭部をメイスで殴られて地面へと落ちた。

「これで終わりだ!!」

落ちたグリフィンに向け、シユンは大剣の刃を首に向けて振り落とし、その首を切断した。

次に落下した衝撃で前進を骨折した女魔導士に向け、大剣の刃を振り落とそうとしたが、突如となく飛んできたライフル弾を左肩に受ける。

「全員、動くな！ 戦闘は終わった!!」

自分を撃ったのは、自分等を弾除けにしていた機甲師団の女将校であった。彼女の背後からは、一個中隊規模の歩兵が続き、管理局の局員や軍の兵士等を殺そうとする下級兵士と捕虜の連邦兵達に銃を向ける。

大剣を地面に突き刺し、両手を挙げながら周囲に耳を澄ませていれば、銃声はほとんど聞こえない。要塞本部で抵抗していた敵部隊が、弾薬でも切らしたのか投降したようだ。

遠くの方を見れば、両手を挙げた軍の兵士や局員たちが列をなして連行されている。

まだ戦おうとする下級兵士や捕虜の連邦兵たちが居たが、続々この場に対した損害も無くやって来た歩兵部隊や戦車部隊の一斉射で撃ち殺され、ようやくの所で戦闘を止めた。殺されそうか、犯されそうになった投降した者達は助け出され、仮の捕虜収容所へと連れて行かれる。

「なあ、俺は正規軍に戻れるか？」

戦闘を終えたシユンは、撃たれた傷を自分で治療しながら、泣きじやくったり茫然としている捕虜の連邦兵達の元へ向かう佐官、それも陸軍大佐に問う。

「いや、お前は投降した者を殺そうとした。後、二戦くらい頑張ってる残れ」

「やれやれ、あの女の所為で二つも増やされたか。ぺっ！」

陸軍大佐はシユンが無抵抗な敵兵の殺害未遂で、正規軍に戻れるのは後二戦ほどだと答えた。

これにシユンは、担架で運ばれる自分が殺そうとした女魔導士を見て、壁に向けて唾を吐き捨てる。

傷の応急処置を終えれば、シユンは要塞内を見渡せる場所まで上がり、そこから戦友達と共に要塞周囲に広がる光景を見て呆然とする。「なあ、たかだか一万三千人が立てこもる要塞に、一体どれだけの損害が出たんだ？」

「さあな。少なからず、この死体だらけの平原と要塞内を見れば、この戦いの異常さが分かるだろう」

呆然としている一人が口を開いてどれほどの死人が出たのかを問えば、シユンは正確な数は分からないが、この戦闘が異常だと言う事だけは分かると答えた。

この戦いにおける双方の戦死者を合わせて百八十九万人以上。防衛側の管理局は九千人以上の死傷者を出して降伏した。対する攻撃側であるワルキューレ側は投入した兵力二百八万の内、百八十八万以上という夥しい数の戦死者を出している。

それも、弾除けの為に投入した捕虜の連邦兵と監視のための下級兵士が大部分だ。投入された二個機甲師団の損害は、彼らを弾除けにしたおかげで殆ど皆無であった。

余りにも損害を出し過ぎた勝利であるが、ワルキューレは衰えることなく、奪われた自分等の領地を奪還し、次なる領土奪還のため、再びこのような無謀とも言える作戦を決行した。

生き残った十万余りの捕虜の連邦兵達は、ワルキューレ陸軍の参謀本部より素質ありと認められ、再訓練を受けた後に下級兵士として部隊に組みこまれるか、反連邦十字軍としてかつての所属先である連邦軍との戦いに投入された。